

平成 9 年度

# 埋蔵文化財緊急発掘調査概報

蔵人遺跡

1998年3月

吹田市教育委員会

## 序

計り知れない災禍をもたらした、平成7年（1995年）1月17日の阪神・淡路大震災では本市も大きな被害を受けました。それから3年の月日がたった今日も、多くの市民の方々の暮らしに影響を与えており、その一刻も早い復旧・復興が進みますよう願っております。

埋蔵文化財包蔵地における復旧・復興を進めるにあたっては、その円滑な推進と埋蔵文化財の保護をいかに図るかが大きな問題となっておりますが、関係者の方々のご理解とご協力を得て、発掘調査を進めてまいりました。

今回、報告いたします蔵人遺跡は市内でも被害の大きかった市域西部に位置する遺跡であり、調査の結果、中世蔵人村について多くの知見を得、大きな成果を挙げることができました。

今後、復旧・復興事業が進むにしたがって、埋蔵文化財の保護については困難な問題も多いかと思われます。しかし、埋蔵文化財は私達が祖先から受け継いで、子孫へと残していくなければならない貴重な遺産であることからも、被災された方々には、できる限り迅速な対応を行っていきたいと考えておりますが、埋蔵文化財の重要性についても関係者の方々にご理解をいただきよう努めていきたいと考えておりますので、何卒、ご理解とご協力をいただきますようお願い申し上げます。

平成10年3月31日

吹田市教育委員会

教育長 今 記 和 貴

## 例　　言

1. 本書は阪神・淡路大震災復旧・復興事業に伴う平成9年度国庫補助事業として実施した蔵人遺跡の発掘調査（通算第21次調査）をまとめたものであり、併せて平成8年度事業として実施した蔵人遺跡の発掘調査（第18～20次調査）の成果も報告する。
2. 発掘調査地点は次のとおりである。

蔵人遺跡 第18次調査	吹田市豊津町931-3
第19次調査	吹田市江坂町2丁目490-1
第20次調査	吹田市豊津町608-1・609-1
第21次調査	吹田市江坂町2丁目485-1・3
3. 発掘調査の整理作業は吹田市岸部北4丁目10番1号、吹田市立博物館で実施し、資料の保管も同所において行っている。
4. 本書の執筆は第2章1は西本が、第2章2は西本・堀口が、第1章、第2章3、4は増田が分担して執筆した。
5. 図中の方位は磁北を示し、標高はT.P.（東京湾標準潮位）を示す。
6. 発掘調査においては、榎谷伸治・榎原一夫・木下ミヨ子・田中満子・田中敏章氏をはじめ、多くの方々の協力を得ました。記して謝意を表します。

---

### 発掘調査参加者名簿

調査主体 吹田市教育委員会

調査指導 大阪府教育委員会文化財保護課

調査担当 西本安秀・堀口健二・増田真木・田中充徳・賀納章雄

調査員 福住日出雄・藤井信之

調査補助員 小田尚幸・落合高晴・川村慎也・佐藤健太郎・村上成幸

## 目 次

第1章 調査の契機.....	1
第2章 藏人遺跡発掘調査の成果	
1. 第18次調査.....	2
2. 第19次調査.....	10
3. 第20次調査.....	38
4. 第21次調査.....	48

## 図 版 目 次

図版一	第18次調査
図版二	第19次調査(1)
図版三	第19次調査(2)
図版四	第19次調査(3)
図版五	第20次調査(1)
図版六	第20次調査(2)・第21次調査

## 挿 図 目 次

第1図 藏人遺跡位置図.....	1
第2図 藏人遺跡調査地点.....	1
第3図 調査区平面図.....	2
第4図 調査区土層断面図.....	3
第5図 井戸2 土層断面図.....	5
第6図 G2 井戸1・土坑1 平面図.....	6
第7図 井戸1 土層断面図.....	6
第8図 G5 溝2 平面図.....	7
第9図 G8 溝3 平面図.....	7

第10図	出土遺物実測図	8
第11図	調査区平面図	11
第12図	A区 土層断面図	13
第13図	A区 第1・2次造構面平面図	14
第14図	A区 第3次造構面平面図	15
第15図	A区 大溝1出土遺物実測図	16
第16図	A区 大溝2ほか出土遺物実測図	18
第17図	A区 下層造構平面図	19
第18図	A区 遺物包含層出土遺物実測図①	20
第19図	A区 遺物包含層出土遺物実測図②	21
第20図	B区 土層断面図	23・24
第21図	B区 第1～3次造構面平面図	25
第22図	B区 第1次造構面平面・断面図	26
第23図	土坑14、ピット18遺物出土状況図	27
第24図	大溝1下層土器群出土状況図	27
第25図	第3次造構面土層断面図	28
第26図	B区 大溝1・2出土遺物実測図	29
第27図	B区 土坑・溝・ピット出土遺物実測図	29
第28図	土坑16土器群出土状況図	30
第29図	B区 土坑16出土遺物実測図	31
第30図	B区 下層造構平面図	34
第31図	B区 落込み1・土坑18出土遺物実測図	35
第32図	B区 遺物包含層出土遺物実測図	35
第33図	調査区平面図	38
第34図	調査区土層断面図(1)	39
第35図	調査区土層断面図(2)	40
第36図	1次面平面図	41
第37図	2次面平面図	42
第38図	3次面平面図	43
第39図	出土土器実測図(1)	44
第40図	出土土器実測図(2)	45
第41図	調査区平面図	48
第42図	調査区断面図	48

## 第1章 調査の契機

阪神・淡路大震災に伴う復旧・復興事業に係る発掘調査については、平成8年12月から平成9年3月にかけて、蔵人遺跡において建築工事に伴う事前調査として3件の発掘調査（通算18～20次調査）を実施し、平成9年12月には蔵人遺跡において倒壊建物の解体後、今後の開発に当たって、事前の造構等の展開状況を把握するための確認調査を1件実施した（通算21次調査）。



第1図 蔵人遺跡位置図



第2図 蔵人遺跡調査地点

## 第2章 蔵人遺跡発掘調査の成果

### (1) 第18次調査

#### 1. 調査の経過

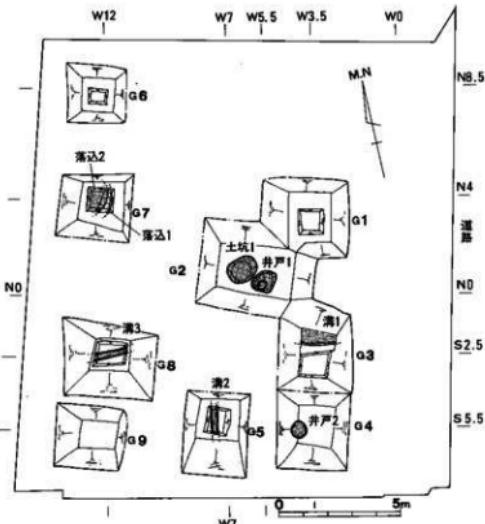
今回の調査は吹田市豊津町931-3において実施したものである。当調査区は平成7年度に藏人遺跡第14次調査として試掘調査を実施し、その際に中世の井戸等の遺構と遺物を検出した。今回は開発予定部分を対象とし、平成8年12月5日～平成9年1月10日にG1～9の調査区を設定し、順次機械掘削、人力掘削を行った。調査面積は合計約87m<sup>2</sup>である。その結果、5次を数える遺構面から中世の井戸2基、土坑1基、溝3条、落込み4基等の遺構を検出した。これらの遺構・土層断面等を順次写真撮影、図面作成等の記録作成後、器材を撤収して調査を終了した。

#### 2. 調査の成果

##### a. 土層序

各グリッドの土層序は、グリッドそれぞれに差異があり、対応関係を求めるのは困難であったが、基本的に第1表のとおりと考えたい。

調査区の現地表は標高(T.P.)3.8m付近であり、東側に向かって下がっている。土層の堆積状況は盛土以下、砂質土・粘土・砂・粘質土等が堆積し、本調査区の西方約300mを南流する高川等の河川の堆積によるところが大きいといえる。I層は現代の盛土層で地表下約1mに及んでいる部分もある。この層の下には水田耕土あるいは畑耕作土(現代)の堆積する例が周辺地では多いが、本調査区では認められなかった。II層は灰色系砂質土で、土中に含まれる鉄分

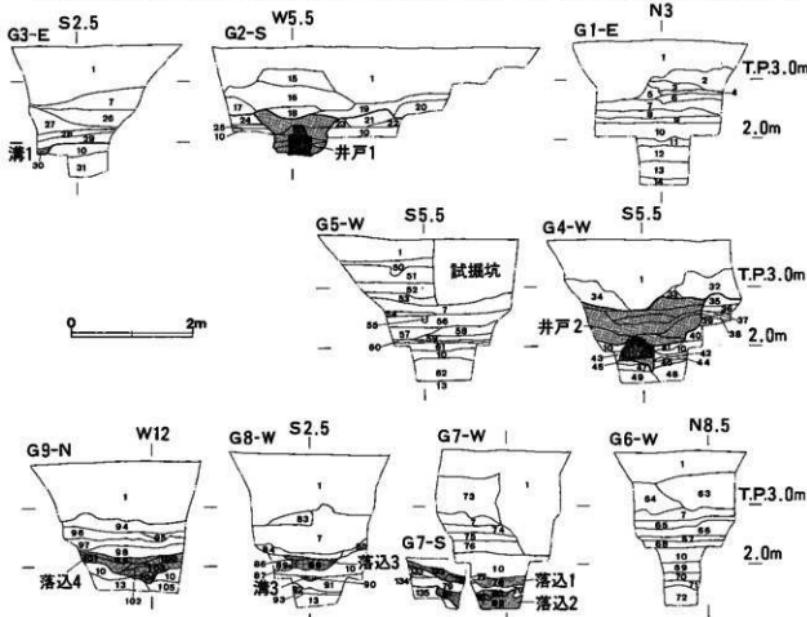


第3図 調査区平面図

第1表 土層・造構対応表

	土層名	標高(T.P.)	次数	造構名
I層	盛土(現代)	2.9~3.8m		
II層	灰色系砂質土	2.7~2.9m		
III層	暗灰色系粘土	2.5~2.7m	第1次造構面	井戸2
IV層	褐色系砂	2.3~2.5m	第2次造構面	井戸1・土坑1
V層	暗灰色系粘質土	2.0~2.3m	第3次造構面	溝1・2、落込み3・4
VI層	灰色系砂質土	1.6~2.0m	第4次造構面	溝3、落込み1
VII層	灰色系砂	1.4~1.6m		
VIII層	灰白色シルト	1.4m	第5次造構面	落込み2

の酸化によって黄色～褐色を呈する場合もある。近世～近代に相当すると思われる。III層は第1次造構面が形成された層で、暗灰色粘土・黒灰色粘土・青白色粘土で構成される。G4で顯著に認められ、井戸2が検出された。IV層は第2次造構面が形成された層で、井戸1・土坑1が確認された。V層はすべてのグリッドで認められ、暗灰色系粘質土で構成される。第3次造構面が形成され、溝1・2、落込み3・4が確認された。VI層は灰色系砂質土で構成され、第

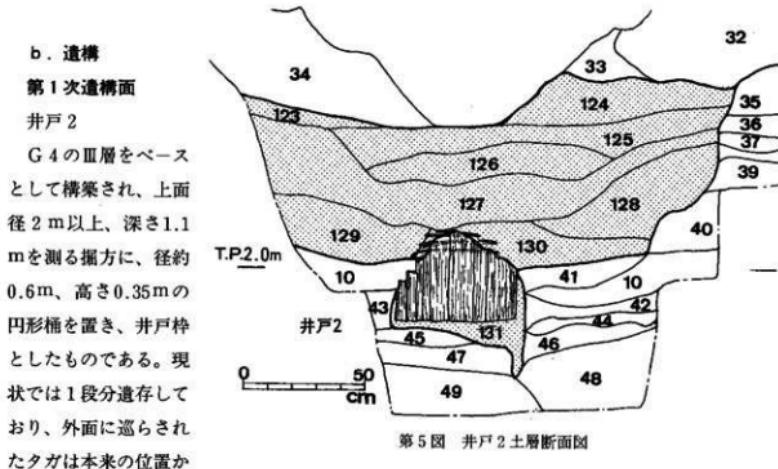


第4図 調査区土層断面図

## 土層名一覧

- |                     |                                  |                            |
|---------------------|----------------------------------|----------------------------|
| 1. 盛上               | 31. 喰灰色粘質土                       | 61. 喰灰色粘質土(10より褐色がかる)      |
| 2. 茶褐色砂質土           | 32. 淡灰色土                         | 62. 黑灰色粘質土                 |
| 3. 白褐色砂             | 33. 灰色土(少し黄色粘土含む)                | 63. 淡茶色砂質土                 |
| 4. 黑灰色シルト           | 34. 喰灰色土                         | 64. 褐色砂質土                  |
| 5. 黄灰色細砂            | 35. 喰灰色粘土                        | 65. 黑白色砂                   |
| 6. 明瞭白色砂(小礫含む)      | 36. 黑灰色粘土                        | 66. 淡灰色細砂                  |
| 7. 黑白色砂             | 37. 褐白色粘土                        | 67. 黄茶色細砂                  |
| 8. 赤茶色粗砂            | 38. 淡灰色粗砂                        | 68. 灰色粘土                   |
| 9. 茶色細砂と灰色細砂の互層     | 39. 茶赤色粗砂(涵水あり)                  | 69. 褐色砂質土                  |
| 10. 喰灰色粘質土(シルト質)    | 40. 淡赤茶色粗砂                       | 70. 灰色砂質土(69より深い)          |
| 11. 灰色粘質土に青灰色粘土含む   | 41. 褐色砂                          | 71. 喰灰色砂質土                 |
| 12. 喰灰色粘質土          | 42. 灰-黄灰色シルト                     | 72. 喰灰色砂質土(粘土混じり)          |
| 13. 灰色砂             | 43. 褐色シルト                        | 73. 茶褐色砂質土                 |
| 14. 淡灰色シルト          | 44. 黄色シルト                        | 74. 赤茶色粗砂                  |
| 15. 灰色砂質土           | 45. 灰白色粘質土(砂少し含む)                | 75. 棕褐色細砂                  |
| 16. 灰褐色砂質土(軟質)      | 46. 灰褐色粘質土(砂少し含む)                | 76. 灰色砂質土(茶褐色砂混じり)         |
| 17. 黑白色砂砾           | 47. 灰色粘質土(砂少し含む)                 | 77. 黑灰色粘質土                 |
| 18. 黄白色砂(軟質)        | 48. 黑灰色粘質土(砂混じり)                 | 78. 白灰色砂(薄込1堆積層)           |
| 19. 灰-灰褐色砂質土        | 49. 灰褐色粘質土                       | 79. 喰青灰色粘質土                |
| 20. 茶褐色砂砾           | 50. 黑褐色土                         | 80. 灰褐色粘質土                 |
| 21. 喰灰色粘質土(粘土混じり)   | 51. 茶茶色砂質土                       | 81. 黑灰色粘土 } (落込2堆積層)       |
| 22. 灰色砂砾            | 52. 茶褐色砂質土                       | 82. 灰色砂・灰色粘土混合層            |
| 23. 淡灰色砂砾           | 53. 茶褐色砂                         | 83. 青灰色細砂                  |
| 24. 黄褐色砂砾           | 54. 灰褐色粘土                        | 84. 青灰色細砂                  |
| 25. 灰色細砂            | 55. 灰白色土                         | 85. 灰色粘質土                  |
| 26. 黄白色粗砂           | 56. 茶-黄褐色砂                       | 86. 灰色粘土(茶色っぽい)            |
| 27. 白灰色砂砾           | 57. 棕褐色砂                         | 87. 灰色・青灰色粘土混合層 } (落込3堆積層) |
| 28. 白褐色細砂           | 58. 喰茶色粗砂                        | 88. 喰青灰色粘土                 |
| 29. 淡灰色粘質土(砂混じり)    | 59. 淡褐色粗砂                        | 89. 喰灰色粘質土                 |
| 30. 明灰色砂(薄込1堆積層)    | 60. 黄褐色粘土                        | 90. 灰色粘土(薄込3堆積層)           |
| 91. 喰灰色砂質土          | 114. 白褐色砂                        |                            |
| 92. 黑色粘土            | 115. 喰黄色砂                        |                            |
| 93. 喰茶色砂質土          | 116. 喰黄色砂                        |                            |
| 94. 黑色粗砂            | 117. 喰褐色砂                        |                            |
| 95. 淡灰色砂            | 118. 灰色砂(灰色粘土混じり) } (井戸1井戸枠内堆積層) |                            |
| 96. 棕褐色砂            | 119. 黄褐色砂                        |                            |
| 97. 茶褐色粗砂           | 120. 黄褐色砂                        |                            |
| 98. 黄灰色シルト          | 121. 灰色砂(粗砂)                     |                            |
| 99. 白灰色粘土           | 122. 灰褐色砂                        |                            |
| 100. 灰色粘土           | 123. 淡灰色土                        |                            |
| 101. 灰色粘土(やや砂混じり)   | 124. 茶褐色砂質土                      |                            |
| 102. 喰灰色粘土          | 125. 灰色砂質土(灰色粘土小塊含む)             |                            |
| 103. 灰色粘土(やや暗い)     | 126. 淡灰色砂質土                      |                            |
| 104. 黑灰色粘土          | 127. 黑灰色土(灰色粘土含む)                |                            |
| 105. 喰灰色砂           | 128. 黑白色粘質土(砂っぽい)                |                            |
| 106. 喰灰色砂質土(軟質)     | 129. 淡茶色砂質土                      |                            |
| 107. 喰灰色砂質土(粘土混じり)  | 130. 喰灰色砂質土                      |                            |
| 108. 灰色砂質土と青灰色粘土混合層 | 131. 灰色砂質土                       |                            |
| 109. 灰色砂質土          | 132. 黑灰色粘質土                      |                            |
| 110. 黑灰色砂質土         | 133. 褐白色粗砂                       |                            |
| 111. 黄褐色砂質土         | 134. 白灰色細砂                       |                            |
| 112. 青白色砂質土         | 135. 灰白色シルト                      |                            |
| 113. 黑灰色砂質土         | 136. 喰灰色砂質土(やや黒っぽい)              |                            |
|                     | 137. 喰灰色砂質土(青灰色粘土塊含む)            |                            |
|                     | 138. 灰白色砂砾                       |                            |
|                     | 139. 喰灰色砂質土(137より青灰色粘土塊含む割合多い)   |                            |
- (落込4堆積層) } (井戸1井戸枠内堆積層)
- (井戸1掘方内堆積層) } (井戸2掘方内堆積層)
- (井戸1掘方内堆積層) } (井戸2掘方内堆積層)

4次造構面（溝3、落込み1）が検出された。VII層は灰色系砂で形成され、湧水が激しく、造構面は検出されなかった。VIII層は最終造構面（第5次造構面）を形成する灰白色シルト層で、G7で落込み2が検出された。



らはずれ、外面上部に重なった状態で認められた。内部は白灰色砂が堆積していた。井戸掘方堆積層（最下層）からは13世紀頃の瓦器碗が出土しているが、細片で少量であり、井戸の構築年代を求めるることは困難である。井戸堆積層の上層からは近世の陶器擂鉢片が出土し、この時期に搅乱を受けたと思われる。

### 第2次造構面

#### 井戸1

G2のIV層で検出された。復元径約1.4mの円形を呈する、深さ約0.7mの掘方に、復元径0.4m、高さ0.2mの円形桶（上段）と径約0.4m、高さ0.35mの円形桶（下段）を2段に積み上げ井戸枠としたものである。上段は一部しか遺存していない。下段の井戸枠はタガを上下2段に巡らしている。桶の内部は砂を主体とした堆積層が見られ、少量の中世土器が出土した。

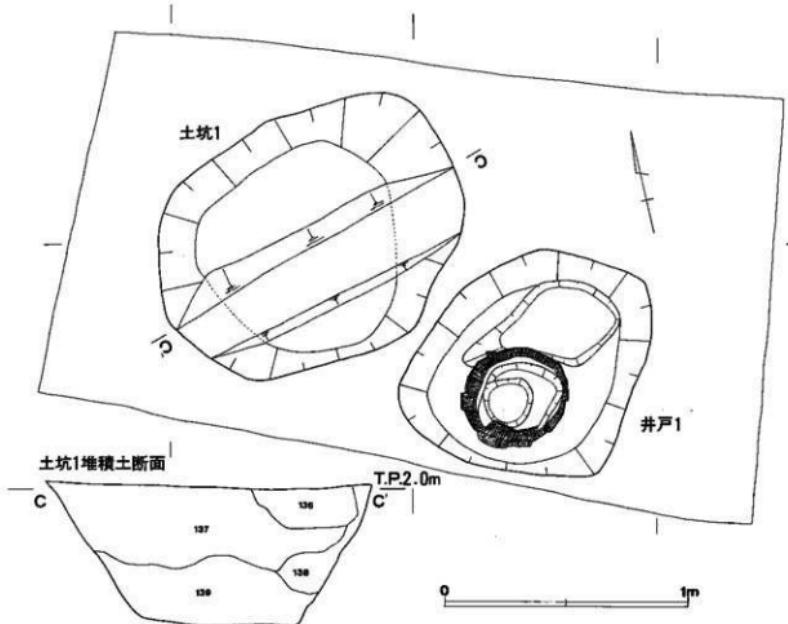
#### 土坑1

井戸1の西隣に位置し、径約1.3×1mの楕円形を呈し、深さ約0.6mのものである。井戸枠の痕跡は止めていないが、井戸の可能性がある。堆積土から少量の中世土器が出土したが、細片で時期の判断までは困難である。

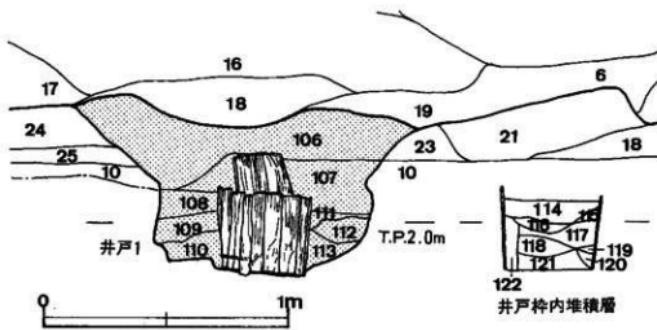
### 第3次造構面

#### 溝1

G3のV層をベースとしたもので東西方向の溝の一部と判断される。深さ約0.2mを測り、溝内堆積土は明灰色砂である。



第6図 G 2 井戸1・土坑1平面図



第7図 井戸1 土層断面図

溝2

G 5のV層をベースとしたもので、南北方向の幅約0.25m、深さ約0.06mを測る。堆積層は暗灰色粘質土に青白色粘土塊を少し含む層である。

落込み3

G 8 の V 層で検出されたもので、径約 0.9m、深さ約 0.2m を測る。堆積層は暗青灰色粘土である。

#### 落込み 4

G 9 の V 層で検出されたが、グリッド外に及ぶため外形については不明である。深さ約 0.4m を測り、堆積層は灰色系粘土で数層に分かれる。

この面の造構からは遺物は検出されておらず、時期については明確でない。

#### 第 4 次造構面

##### 溝 3

G 8 の VI 層で検出され、幅約 0.3m、深さ約 0.1m を測る東西方向のものである。堆積層は灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

#### 落込み 1

G 7 の VI 層で検出された。グリッド外に及ぶため外形については不明で、深さ約 0.15m を測る。堆積層は白灰色砂である。瓦器碗、土師器羽釜片が少量出土した。

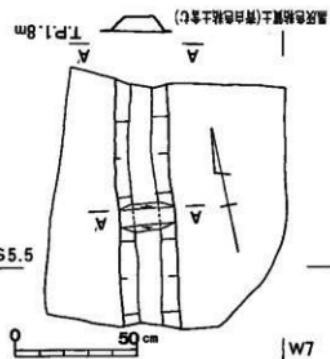
#### 第 5 次造構面

##### 落込み 2

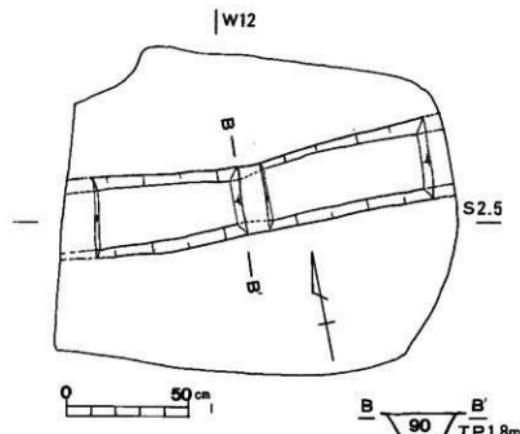
G 7 の V 層で検出された。落込み 1 の直下に位置する。グリッド外に及ぶため外形については不明で、深さ約 0.3m を測る。堆積層は灰褐色粘質土、黒灰色粘土、灰色砂・灰色粘土混合層に分かれる。

#### c. 出土遺物

遺物は土師器（皿、杯、甕、羽釜、足釜）、須恵器（甕、捏鉢）、瓦器（碗）、陶器など土器類のほか、井戸枠に使用された桶などが認められた。遺物収納箱約 5 箱分あり、鎌倉～江戸時代の所産と判断されるが、ほとんどが細片であり、図化できるものは少ない。ここでは主な遺物の概略について記すこととする。



第 8 図 G 5 溝 2 平面図



第 9 図 G 8 溝 3 平面図

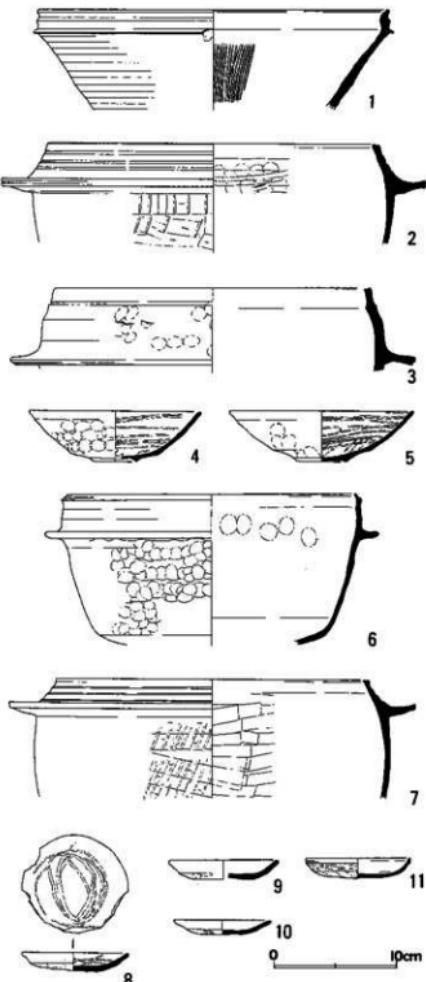
### 遺構出土土器（第10図 1～5）

(1)はG 4 井戸2堆積層上層出土の備前焼系の擂鉢である。復元径28.6cm、残高8.3cmを測る。内面には5条/cmの擋目が施される。(2)はG 2 井戸1上面出土の瓦器羽釜の口縁から体部である。復元径26.2cm、残高8.3cmを測る。外面体部はヨコ方向にケズリが施される。(3)はG 7 落込み1内堆積層出土の土師器羽釜である。復元径26.0cm、残高6.8cmを測る。外面にわずかに粘土紐の痕跡が認められる。(4)はG 7 落込み1内堆積層出土の瓦器碗である。復元径14.0cm、底径3.5cm、残高4.2cmを測る。外面は押圧調整の後口縁端部にヨコナデを施し、内面には横方向の疎らなヘラミガキを行う。底部は断面三角形状の形骸化した低い高台が付く。尾上編年の和泉型III-3に相当すると判断される。(5)はG 7 落込み2内堆積層出土の瓦器碗である。復元径15.0cm、底径4.2cm、残高4.2cmを測る。(4)とはほぼ同型式の土器である。

### 遺物包含層出土土器（第10図 6～11）

(6・7)はG 1 第Ⅲ層（明黄白色砂層土層NO.6）出土土器である。(6)は土師器羽釜である。復元径23.4cm、残高12.5cmを測る。体部外面は押圧調整が顕著で、内面はヨコナデが施される。底部は内外面ともヘラケズリが行われ

る。(7)は瓦器羽釜である。復元径25.6cm、残高9.8cmを測る。体部外面は横方向のタタキ整形の後、横方向にヘラケズリを行い、内面は横方向の板ナデを施す。(8・9)はG 7 第V層（暗灰色粘質土層 土層NO.10）出土土器である。(8)は瓦器皿で、復元径8.7cm、器高1.5cmを測る。外面下半は指頭による押圧調整、上半はヨコナデを施す。内面はヨコナデ及びナデの後、疎ら



第10図 出土遺物実測図

なヘラミガキを施す。(9)は土師器小皿である。復元径8.0cm、器高1.2cmを測る。外面下半は指頭による押圧調整、上半はヨコナデを施す。内面は上部はヨコナデ、底部はナデを施す。(10)はG 6 第V層（土層NO.10）出土の土師器小皿である。復元径9.0cm、器高1.6cmを測る。外面下半は指頭による押圧調整、上半はヨコナデを施す。内面は上部はヨコナデ、底部はナデを施す。端部は丸い。(11)はG 6 第VI層（暗灰色砂質土層 土層NO.72）出土の土師器小皿である。復元径8.5cm、器高1.7cmを測る。外面下半はヘラケズリ、上半は横方向の板ナデを施す。内面は上部はヨコナデ、底部はナデを施す。

#### d. まとめ

今回の調査は、建物の基礎部分を対象としたもので、部分的な調査にとどまつたが、5次にわたる遺構面が検出された。まず第1次遺構面は中世の井戸1基が確認された。この面の時期は井戸の出土遺物からは明らかにできず、井戸の構造から室町時代と推定するにとどまる。井戸のみの検出であったが、対応する建物等が展開するものと思われる。第2次遺構面は中世の井戸1基、土坑1基が確認された。井戸1出土の土器より、14世紀頃の生活面と考えられる。第3次遺構面は溝、落込み等の遺構が確認された。溝2は南北方向、溝1は東西方向で条里の方向に合致する。出土遺物はほとんどなく、土質からいっても生活面というよりも耕作層と考えたほうがよいかもしれない。時期は上下の層位からみて鎌倉末頃と考えるのが妥当と判断される。第4次遺構面は溝と落込みが確認された。溝3は東西方向で、条里の方向に合致する。落込み1の出土遺物から13世紀頃と判断される。第5次遺構面はG 7の灰白色シルトをベースとしたもので、検出した遺構面では最終面である。落込みが検出され、出土遺物から13世紀中頃の生活面と判断される。以上のとおり、検出した遺構と遺物から、13世紀頃から居住区域が展開し、鎌倉末頃に一時水田化されるが、再び居住域となったものと考えられ、特に井戸の構築された14世紀代と室町時代に居住域としてのピークがあるものと判断される。また、出土遺物については、鎌倉～室町時代の土師器、須恵器、瓦器等の日常容器が少量でしかも細片がほとんどであるが、建物跡等が顕著に検出された第2・6次調査では、鎌倉～室町時代の日常容器のほか青磁・鉄器・漆器等多彩な高級品が見られる。この違いは調査区が部分的であって居住域のデータを網羅していないためなのか、あるいは、居住域の構成員の差の傾向を示しているのかなどについては即断できず、今後の調査の進展に期待したい。

#### 〈参考文献〉

- 尾上 実「大阪南部の中世土器—和泉型瓦器統一」「中近世土器の基礎研究」1985年 中世土器研究会

## (2) 第19次調査

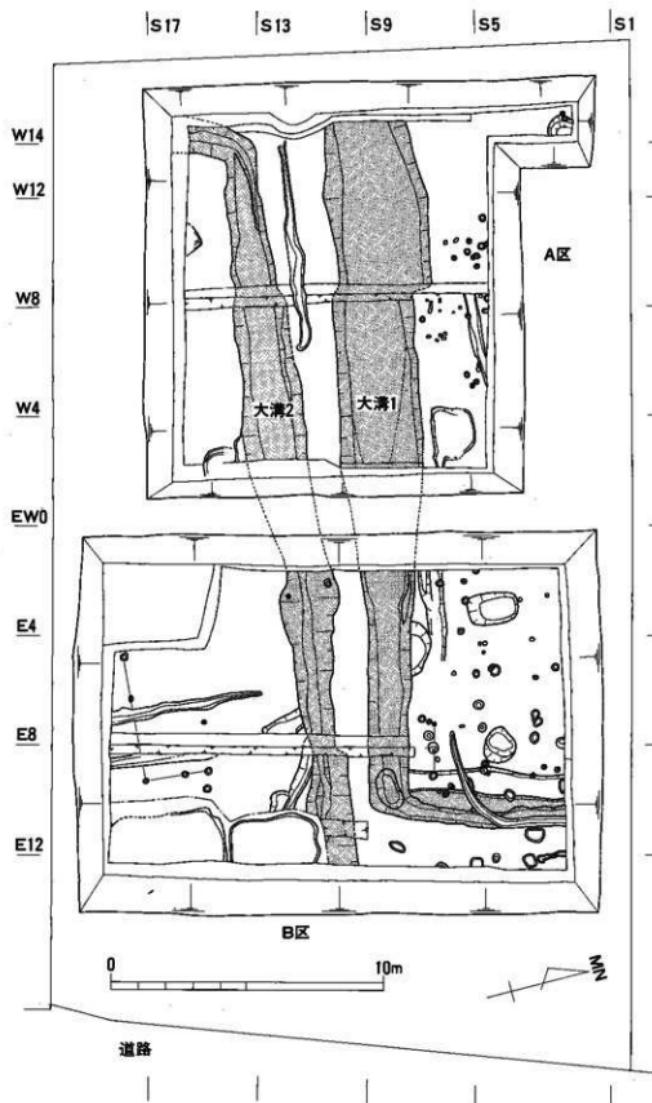
### 1. 調査の経過

今回の調査は吹田市江坂町2丁目490-1において実施したものである。当調査区は平成8年度に蔵人遺跡第15次調査として試掘調査を実施し、その際に中世の溝等の遺構と土師器等の遺物を検出した。今回の調査は開発予定部分を対象とし、平成9年1月20日～平成9年3月31日に実施したもので、調査面積は約465m<sup>2</sup>である。調査は排土の仮置場を確保する必要から2分割して実施することとした。まず、開発予定区の西半部の調査区（A区）に着手し、機械掘削、人力掘削及び精査を行ったところ、地表下約1.2mまで3次にわたる遺構面を認めた。主な遺構は第3次遺構面で認め、大溝、溝、土坑、ピット等を検出した。これより以下は部分的な調査となり、調査区の北端部及び南端部にそれぞれ東西方向の13×2mの調査区を設定した。北側の調査区をA-N-W区、A-N-E区と細分し、南側の調査区もA-S-W区、A-S-E区とした。それぞれの調査区で人力掘削及び精査を進めたところ、4～7次の遺構面を認め、ピット、水田畦畔、土坑、溝等を検出したが、総じて検出遺構は稀薄であった。以上検出した遺構、土層断面等を順次写真撮影、図面作成等の記録作成後、埋め戻しを行ってA区を終了した。引き続き東半部（B区）の調査に着手し、機械掘削、人力掘削及び精査を行った結果、A区と同じ第3次遺構面を認め、大溝、溝、土坑、ピットなど多くの遺構を検出した。これより以下は部分的な調査となり、調査区の北側と南側にそれぞれ東西方向の10.5×2mの調査区を設定した。これらも西と東に細分し、それぞれB-N-W区、B-N-E区、B-S-W区、B-S-E区とした。それぞれの調査区で人力掘削及び精査を進めたところ、4～9次の遺構面を確認し、溝、ピット、土坑、水田畦畔等を検出した。以上検出した遺構、土層断面等を順次写真撮影、図面作成等の記録作成後、埋め戻しを行い、器材を撤収して調査を終了した。

### 2. 調査の成果

#### a. 土層序

調査区の現地表高は北東端で標高(T.P.)4.5mを測り、南及び西側に向かって緩やかに0.1～0.2m下がる。第1層は現代の盛土層で、第2層は水田耕土・床土層（現代）である。第3層は褐色～茶色を呈する砂質土及び細砂である。近世以前に相当すると思われる。第4層は砂・砂質土で構成される。土層断面の観察によるとW4付近で南北方向の高まりが認められ、畦畔の可能性がある。第5層は黄色系の砂質土であり、この層をベースに第1次遺構面が形成され、A区とB区で土坑、A区でピットを検出した。第6層は細砂・シルトを主体とした層で、この層をベースに第2次遺構面が形成され、A区で土坑、溝、ピット等、B区ではピットを検出した。第7層は標高約3.0～3.1mで砂・砂質土をベースに第3次遺構面が形成され、主要な遺構はこの面で検出した。13世紀後半から15世紀に遺構が展開する土層と判断できる。第8層は



第11図 調査区平面図（第3次造構面）

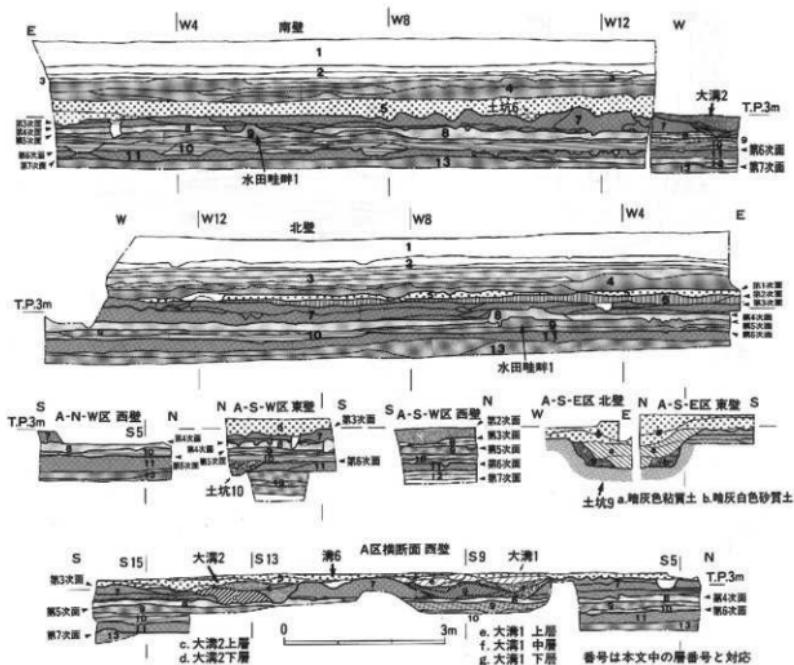
第2表 土層・遺構対応表

主な土層名	遺構面	遺構名	
		A区	B区
1層 盛土(現代)			
2層 水田耕土・床土			
3層 褐色系砂質土・細砂			
4層 茶褐色砂・砂質土			
5層 暗黄色砂質土	1次面	土坑1・2、ピット1	土坑12・13
6層 黄色砂質土	2次面	溝1~5、土坑3~5、ピット	ピット
7層 黄色砂	3次面	大溝1・2、溝6、土坑6~9、ピット2~8、ピット群	大溝1・2、溝7~12、土坑12~17、ピット12~17、柵1・2
8層 黒灰色粘質土	4次面	ピット9~11、水田畦畔	溝13、落込み1
9層 暗灰色粘質土	5次面	水田畦畔1	土坑18・19、ピット
10層 淡灰色砂質土			
11層 淡灰色粘砂質土	6次面	土坑10、溝	溝14、ピット
12層 茶褐色粘土			
13層 淡灰色砂質土	7次面		
14層 灰色細砂	8次面		ピット
15層 茶褐色粘質土	9次面		水田畦畔2

黒灰色粘質土をベースとし、第4次遺構面が形成され、A区でピット、畦畔等、B区では溝、落ち込みを検出した。13世紀後半頃の中世水田層と判断できる。第9層は暗灰色粘質土をベースとし、第5次遺構面が形成され、A区で水田畦畔、B区では土坑、ピットを検出し、水田層と考えられる。レベルは水田畦畔を境として東側は標高約2.8mで、西側はそれより約0.1~0.2m低く、段状をなす。13世紀中葉頃に属すると考えられる。第10層は砂・砂質土で構成される。第11層は粘砂質土等で第6次遺構面が形成され、A区で土坑、ピット、溝等、B区では溝、ピットを検出した。12世紀末~13世紀初めに属すると考えられる。第13層は灰色系砂質土をベースとして第7次遺構面が形成される。A区で浅い落込みを検出した。落込み内堆積土は第12層の茶褐色粘土である。第14層は細砂を主体とする遺物包含層で、古墳時代~奈良時代の遺物が出土した。この層をベースとして第8次遺構面が形成され、B区でピット群を検出した。遺構からは遺物は出土せず、形成時期については不明である。第15層は茶褐色粘質土を主体として構成され、遺物は出土しなかった。この層をベースとして第9次遺構面が形成され、B区で南北方向の畦畔を検出した。第14層出土遺物からみて奈良時代以前に属する可能性がある。

#### b. 遺構と遺物

遺構・遺物の概要は、A・B区のそれぞれの調査区ごとで述べることとする。



第12図 A区 土層断面図

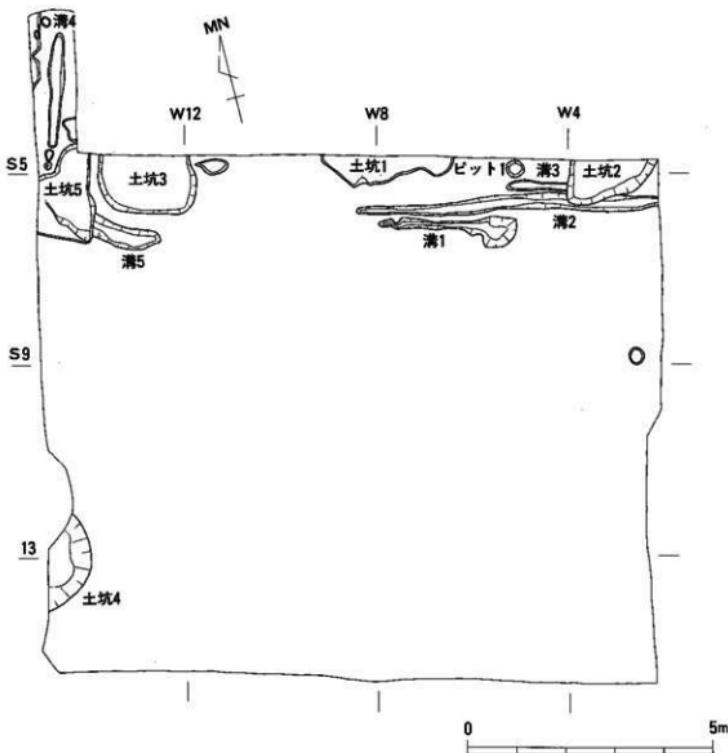
## < A区 >

### ①第1次遣構面（第13図）

土坑1・2は調査区北端で確認したもので、北半部は調査区域外に当たるため形状については不明である。土坑2は東西検出長約2.7m、南北検出長0.6m、深さ0.1mを測り、土坑3は東西検出長約1.8m、南北検出長0.9m、深さ0.1mを測る。ピット1は径約0.35m、深さ約0.06mを測る。以上の遣構内堆積土はいずれも灰色砂質土である。出土遺物は土師器等細片のみで時期の特定はできなかった。

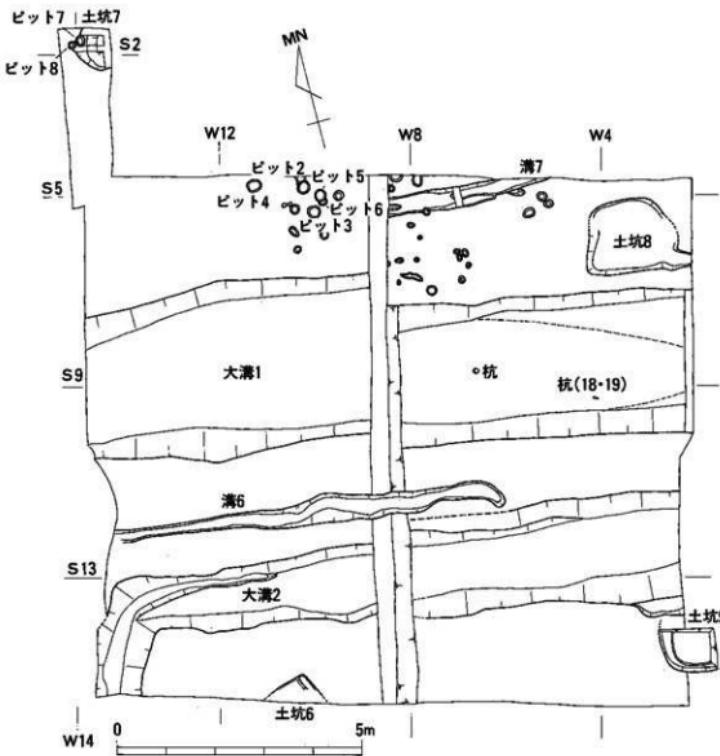
### ②第2次遣構面（第13図）

土坑3は調査区北端で確認した隅丸方形を呈するもので、東西検出長約1.8m、南北検出長0.9m、深さ約0.1mを測る。遣構内堆積層は暗灰色粘質土で、出土遺物は土師器細片のみで時期の特定はできなかった。土坑4は調査区西端で認めた円形を呈するもので、東西検出長約0.9m、南北検出長2.0m、深さ約0.35mを測る。遣構内堆積層は暗灰色砂質土（青灰色粘土塊



第13図 A区 第1・2次遺構面平面図

混じり)で、出土遺物は瓦器細片のみであった。土坑5は調査区西端で検出した不整形を呈するもので、東西検出長約1.2m、南北検出長2.0m、深さ約0.2mを測る。遺構内堆積層は暗灰色砂質土で、出土遺物は土師器、須恵器細片があった。溝は5条確認した。溝1~5は東西方向に走行し、溝4は南北方向で直交する方位にあり、いずれも断面U字形を呈する。溝1は西端幅0.2mで、東端は0.6mの幅広となり、深さ約0.1mを測る。東西両端は短く途切れる。溝の堆積土は暗灰色砂質土で、出土遺物は土師器細片のみで時期の特定はできなかった。溝2は幅約0.3m、深さ約0.1mを測り、西先端部は途切れる。溝底の比高差から西へ流れたと考えられる。溝3は幅約0.2m、深さ約0.05mを測り、西先端部は短く途切れ、東側は土坑2と重複する。溝4は幅約0.2~0.3m、深さ約0.1mを測り、南北両端は途切れる。溝5は幅約0.4m、深さ約0.1mを測り、西先端部は土坑5に重複し、東側は短く途切れる。



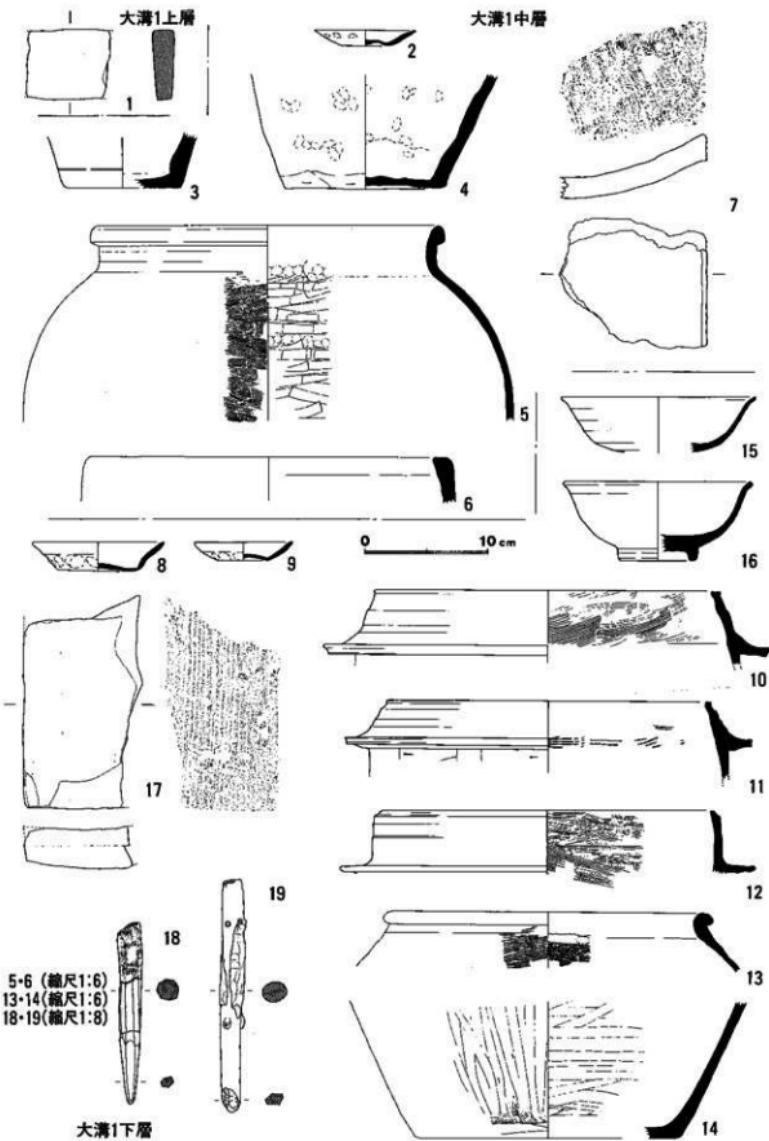
第14図 A区 第3次造構面平面図

### ③第3次造構面（第14図）

A区で最も多くの造構を検出した面である。重複した造構が見られ、出土遺物も時期差が認められることから、造構の形成時期も幅があるものと考えられる。

#### 大溝1

東西方向に走行し、断面逆台形を呈する溝で、最大幅3.7m、深さ約0.5mを測る。溝の中には、杭をW7付近に1本とW4の南岸に近い位置に2本並んだものを検出した。堆積土は3時期に分けることができる。上層は灰色系の砂質土で、下・中層の堆積後、最上部で薄く堆積したものである。中層は暗灰色粘質土で、断面V字状を呈し、掘り直された痕跡がみられる。下層は暗灰色系砂質土で構成される。出土遺物は土師器（皿、羽釜）、瓦器（椀）、須恵器（捏鉢、甕）、瓦質土器（羽釜、火鉢）、陶器、青磁（椀）、瓦（平瓦、丸瓦）、獸骨など多彩な遺物がみられたが、ほとんどが破片である。ここでは図化できた主な遺物の概略について記すこととする。



第15図 A区 大溝1出土遺物実測図

### 大溝1上層出土遺物（第15図）

(1)は砥石である。平面は矩形で、断面はややくさび形を呈する。

### 大溝1中層出土遺物（第15図）

(2)は土師器皿である。底部は上がり底気味で、口縁部内外面に煤の付着が認められる。(3)は瀬戸系陶器の壺底部の破片である。外面にオリーブ黄色の釉が施される。(4・5)は備前焼甕である。(5)は復元口径42.0cm、残高24.1cmを測る。口縁端部は丸く折り曲げられ、玉縁状を呈し、外面は横ハケ、内面は横ハケとナテが施される。備前Ⅲ期に相当する。(7)は平瓦の破片で凸面に繩目タタキを施す。

### 大溝1下層出土遺物（第15図）

(10)は土師質の羽釜である。やや外下方に長く伸びる鈎部を有し、口縁部は内上方に長く伸びる。外面は弱い段を有する。内面は横ハケを施す。菅原編年の和泉D1型に相当する。(11)は瓦質の羽釜である。やや外上方に伸びる鈎部を有し、口縁部は内傾しながら上方に伸び、端部は弱く外反する。外面は3段の弱い段を有する。鈎下外面は横ヘラケズリを施す。菅原編年の河内D1型に相当する。(13)は瓦質甕である。口縁部は玉縁状を呈し、外面は横タタキ、内面は横ハケを施す。(15・16)は龍泉窯系青磁で、横田・森田分類IV類に相当する。(16)は弱く外反する口縁を有し、釉は底部外面には施されていない。見込みには印花文が認められるが明瞭でない。(17)は厚手の平瓦か軒平瓦の破片である。(18・19)は杭である。(18)は丸木材の約2／3下部を面取りし、さらに先端部を加工して尖らせる。(19)は枝払いを行った程度の丸木の先端部をわずかに加工して尖らせており、樹皮が残る。

### 大溝2

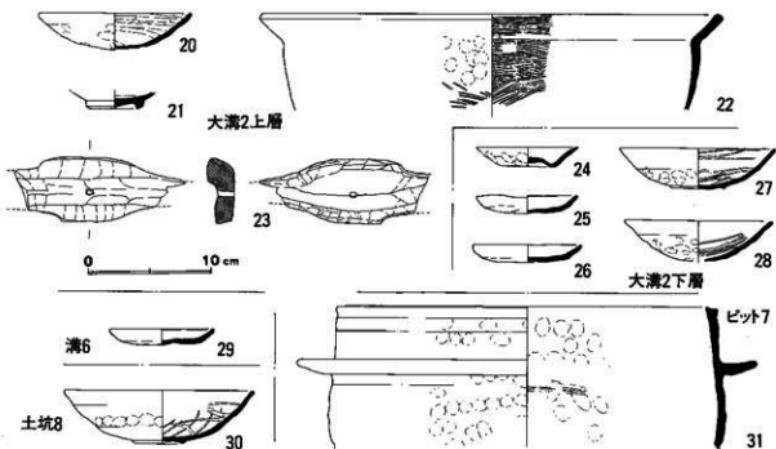
東西方向に走行するU字状の溝で、調査区の西端部分では南側には直角に曲がっている。最大幅2.2m、深さ約0.4mを測る。堆積土は上下の2層に分けることができ、上層は暗灰色系の砂質土、下層は茶灰色粘質土で構成される。出土遺物は土師器（皿、羽釜、甕）、瓦器（椀、皿）、須恵器（捏鉢）、瓦質土器（羽釜、足釜）、陶器、青磁、木製品（鳥形？）などがみられた。大溝1に比べ量は少なく、ほとんどが破片である。以下、主な遺物の概略について記す。

### 大溝2上層出土遺物（第16図）

(20)は瓦器椀で、内面に疎らなヘラミガキを施す。底部には痕跡程度の貼付高台が認められる。尾上編年のIV-2に相当する。(21)は白磁椀底部で横田・森田分類IX類に相当する。(22)は土師器鍋である。弱く「く」の字状に屈曲する口縁部をもち、外面は押圧の後、ハケ調整、内面は横ハケを施す。(23)は用途不明木製品である。内面に抉りを入れ、断面U字状にし、外面をやや丸みを持たせて加工し、片方は首状に削り出し、反対側はすばめるような加工がなされている。体部の中央に5×4mmの矩形の穿孔があり、鳥形木製品の可能性がある。材質はコウヤマキである。

### 大溝2下層出土遺物（第16図）

(24・25)は土師器皿、(26)は瓦器皿、(27・28)は和泉型の瓦器椀である。(27)は尾上編年のIV-



第16図 A区 大溝2ほか出土遺物実測図

1に相当する。(28)は底部高台は認められず、尾上編年のIV-3に相当する。

#### 溝

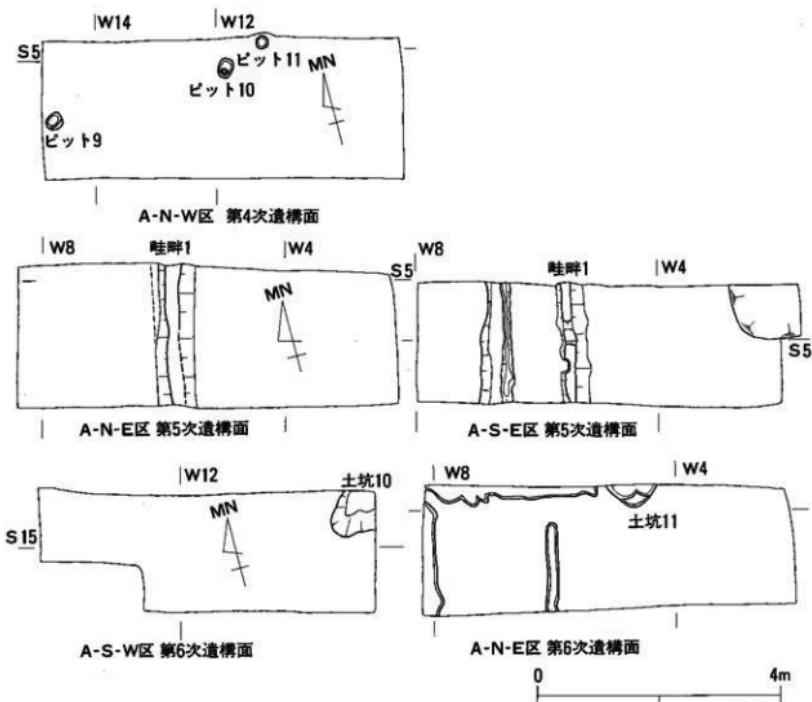
2条検出した。溝6は東西方向に走行し、幅約0.2~0.5m、深さ約0.1mを測り、溝底の比高差から西へ流れたと考えられる。溝の堆積土は灰色砂質土で、出土遺物は土師器皿片、瓦器細片が出土した。溝7は調査区の北端で検出した東西方向に走行するものである。幅約0.4m、深さ約0.1mを測り、溝の堆積土は暗灰色砂質土である。出土遺物は土師器、瓦器細片があった。

#### 土坑

4基検出した。土坑6は調査区の南端で部分的に検出したもので、現状は方形を呈する。土坑7は調査区の北端で部分的に検出したもので、現状は円形を呈する。東西検出長約0.7m、南北検出長0.9m、深さ約0.2mを測る。土坑8は不整形を呈し、東西最大長約2.2m、南北長1.5m、深さ約0.1mを測る。遺構内堆積土は黒灰色粘砂質土で、出土遺物は土師器片、瓦器片があった。(30)は和泉型の瓦器椀である。断面三角形状の低い高台が付く。内面は疊らなヘラミガキを行う。尾上編年のIII-3に相当する。土坑9は調査区の南端で部分的に検出したもので、隅丸方形を呈する。東西検出長約1.1m、南北検出長0.9m、深さ約0.7mを測る。遺構内堆積土は暗灰色砂質土、暗灰色粘土、暗灰白色粘質土など数層に分かれ、壁面の角度はやや急である。出土遺物は土師器片があった。

#### ピット

大溝1の北側の平坦面に集中して検出した。径約0.1~0.3m、深さ0.05~0.1mを測り、16基確認した。遺構内堆積土は暗灰色砂質土である。溝7の南側にもピットを集中して検出した。また、調査区北西端部でピットを2基検出した。ピット7は土坑7に重複し、土坑7より後出



第17図 A区 下層造構平面図

である。 $0.15 \times 0.25\text{m}$ の楕円形で、深さ $0.3\text{m}$ を測る。内部の堆積土は暗灰色粘質土で、柱根が遺存し、その上部は焼け炭化していた。瓦賀羽釜(31)が出土した。ピット8は径 $0.15\text{m}$ の円形で、深さ $0.15\text{m}$ を測る。造構内堆積土は暗灰色粘質土で柱根が遺存していた。

#### ④第4次造構面（第17図）

黒灰色粘質土をベースとする中世の水田面と判断される。N-W区でピット3基を検出した。径 $0.2\sim0.3\text{m}$ 、深さ約 $0.05\text{m}$ を測る。配列に規則性は認められない。遺物は出土しなかった。また、北壁断面W6付近で第9層の畦畔の上に黄色砂を盛り上げた状況が見られ、水田畦畔とみられる。

#### ⑤第5次造構面（第17図）

暗灰色粘質土をベースとする中世の水田面と判断される。N-E区及びS-E区で一連のも

のと思われる畦畔を検出した。畦畔1は下部幅0.5~0.6m、上部幅0.2~0.3m、高さ0.1~0.15mを測る断面台形を呈するもので、N12°Eの方位に位置する。ここを境として西側が東側より約0.2m低くなる。また、S-E区では畦畔の西側に幅0.5m、深さ約0.05mを測る同方位の浅い溝を検出した。

#### ⑥第6次造構面（第17図）

茶褐色粘質土をベースとする。S-W区で土坑10、N-E区で溝、ピットを検出した。土坑10は部分的に確認した。検出長東西0.7m、南北0.7m、深さ0.3mを測る。出土遺物は土師器細片が出土したのみである。溝は南北方向の小溝2条、東西方向の小溝1条を検出した。耕作に係わるスキ溝の可能性がある。

#### ⑦第7次造構面

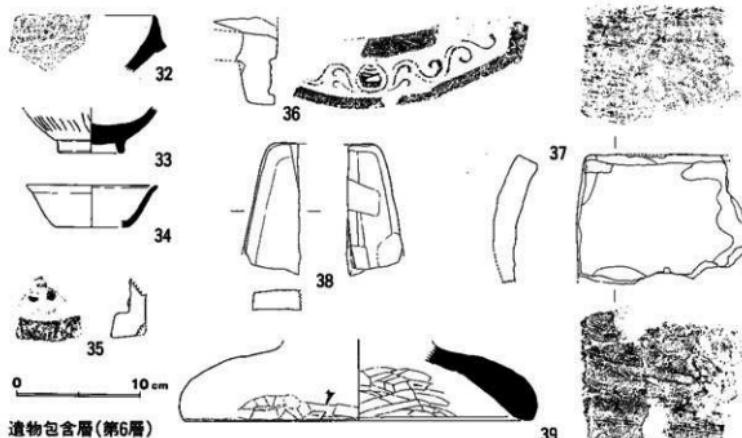
淡灰色砂質土をベースとする。S-W区で西側に緩やかに下がる落込みを検出した。堆積土は茶褐色粘土で、出土遺物はなかった。自然地形の可能性がある。

#### ⑧遺物包含層出土遺物（第18・19図）

造構出土以外の遺物を一括して以下に記す。

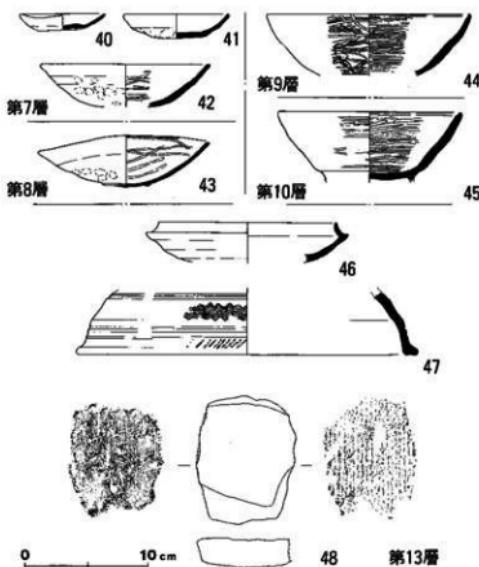
##### 第6層出土遺物

陶器、青磁、瓦など出土した。(32)は備前焼擂鉢である。口縁端部は上方へ拡張し、面を持つ。内面に7条の擂目を施す。備前IV期に相当する。(33)は龍泉窯系青磁碗で、横田・森田分



第18図 A区 遺物包含層出土遺物実測図①

類IV類に相当する。(34)は白磁皿で横田・森田分類IX 1に相当する。(35)は巴文軒丸瓦の破片で、珠文の一部が認められる。(36)は瓦質の軒平瓦である。上外縁部は広く、下外縁部は狭い。瓦面面縦幅3.0cmを測る。側縁はヘラケズリを施す。文様は宝珠唐草文を中心の宝珠から左右に唐草文が伸びる。(37)は平瓦で、(38)は瓦質の用途不明品である。(39)は瓦質の用途不明品である。外面は下端部に横方向のヘラケズリ後横ナデ、内面に横方向のヘラケズリを施す。底部径28.6cmを測る。瓦質露盤の可能性がある。



第19図 A区 遺物包含層出土遺物実測図②

#### 第7層出土遺物

土師器・瓦器片が出土した。(40)は土師器皿、(41)は瓦器皿、(42)は瓦器碗である。

#### 第8層出土遺物

瓦器が出土した。(43)は和泉型の瓦器碗である。底部にはわずかに高台が残る。尾上編年III-3に相当する。

#### 第9層出土遺物

土師器、瓦器、黒色土器、白磁など出土したが、ほとんどが細片である。(44)は楠葉型の瓦器碗で口縁内面直下に沈線を施す。橋本編年II-1に相当する。

#### 第10層出土遺物

土師器、瓦器、須恵器など出土したが、大部分が細片である。(45)は楠葉型の瓦器碗で口縁内面直下に沈線を施す。橋本編年I-2に相当する。

#### 第13層出土遺物

土師器、須恵器、瓦など出土したが、破片のみである。(46)は須恵器杯身である。中村編年II型式4段階に相当する。(47)は須恵器器台据部である。外面は下方に2条の凹線、上方に2条の凹線が施され、その間に11条単位の横描波状文が施される。スカシの痕跡が認められる。(48)は道具瓦である。平瓦の側縁部を山形に切り取ったもので、凹面に布目痕、凸面に網目タキ痕が残る。

## < B 区 >

### ① 第1次造構面（第22図）

調査区の東南部において、溜め池状の土坑を2基を検出した。東壁断面の観察から両者には重複関係が認められ、土坑12が新しく、土坑13が古い。いずれも平面隅丸方形を呈し、堆積土は砂～腐植質シルトの互層で、徐々に自然埋没したと思われる。土坑12は東西1.84m以上、南北3.2m、深さ0.7mを測り、水漏れを防ぐ措置として底面に粘土を張り付ける。土坑13は東西1.94m以上、南北4.26m以上、深さ0.72mを測り、5本の杭を護岸用に打ち込んでいた。

時期については、瓦器挽、土師器小皿など13世紀代の残留遺物のみが出土しているが、後述する下層造構（第3次造構面）の下限年代が15世紀代を示していることから、これ以降の時期が想定される。

### ② 第2次造構面

調査区北端部において、第3次造構面の溝7と重複してピット1基のみを検出した。断面観察の結果から、一層上からの掘込みであることが看取できる。ピット12は東西0.55m、南北0.25m以上、深さ0.13mを測る。ピット内から遺物は出土しなかった。

### ③ 第3次造構面（第21図）

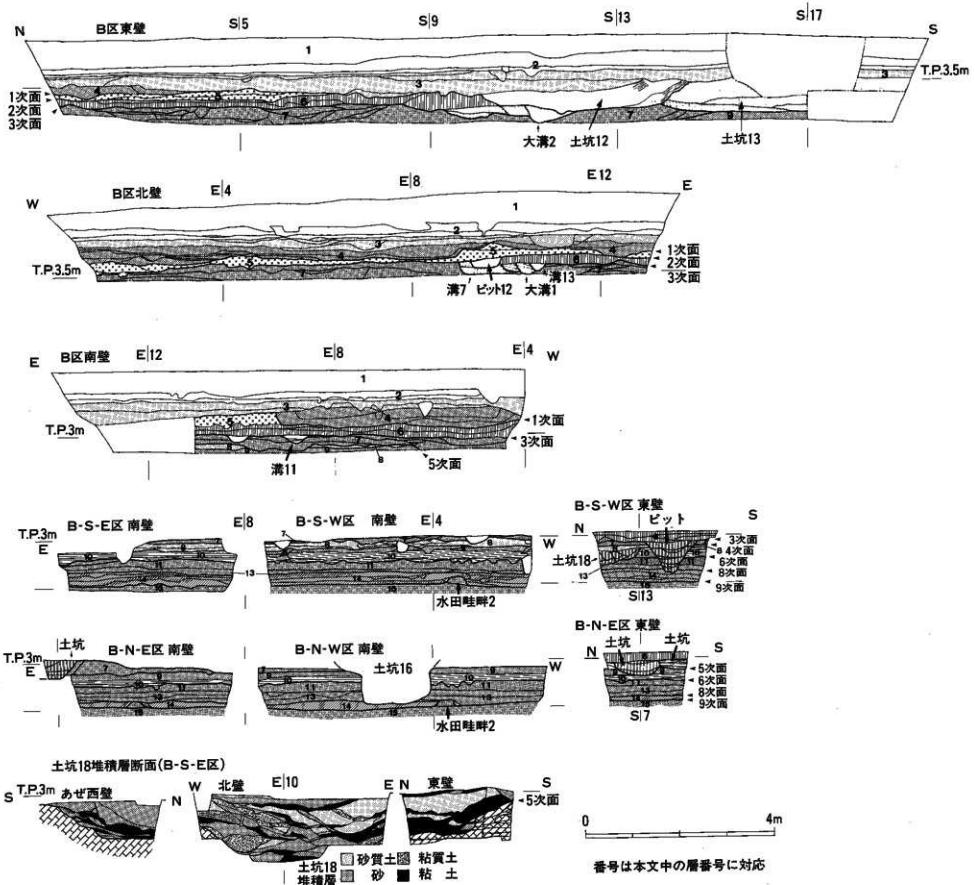
調査区全域で方形区画を形成する大溝2条、小溝5条、ピット群61基（うち櫛2列）、土坑5基、木杭などを検出した。全体的に造構面の地盤高は、調査区北半部が若干高く、南半部へと僅かに傾斜する。このうちの北半部のベース層はラミナ（葉理）の見られる砂層で、氾濫後の自然堤防状の高まりと考えられる。この高まりの裾を巡る様に、方形区画を形成する大溝1が検出され、この内側に土坑やピットが多く集中する。土坑は廐棄坑や素掘り井戸と考えられ、ピット群については建物の柱穴や櫛列であり、これらは大溝で区画される屋敷地の一部と考えられる。

### 大溝1（第24図）

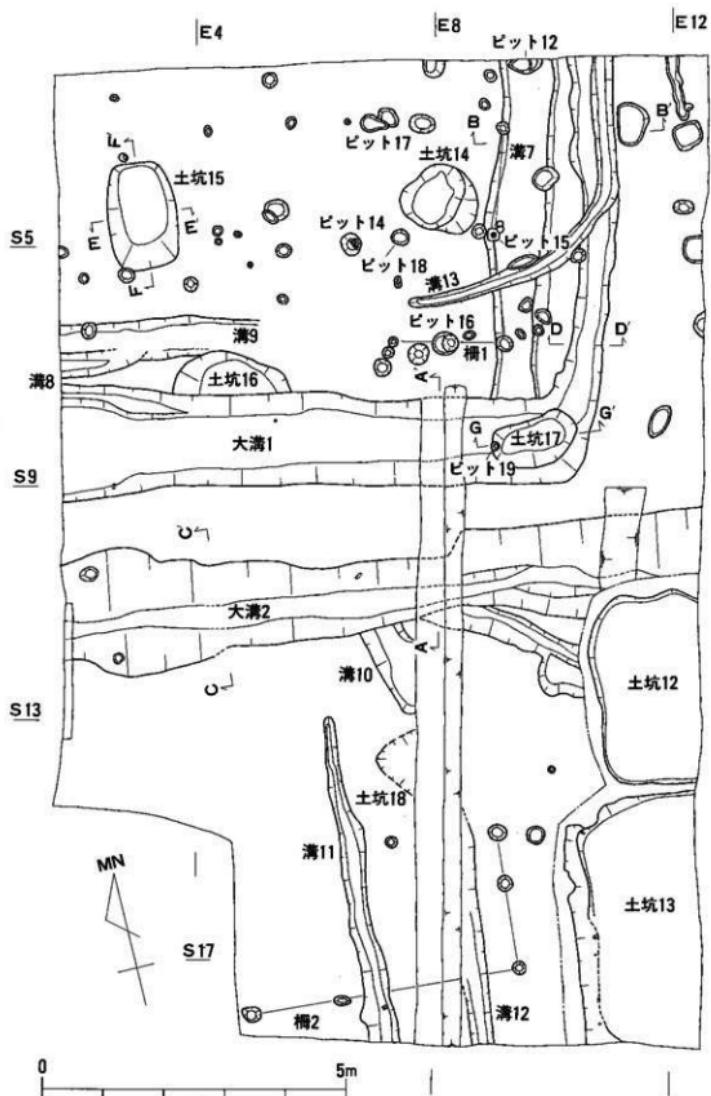
方形区画を形成する大溝である。平面L字形を呈し、A区および調査区外へと伸びる。断面逆台形を呈し、検出面で幅1～2m、深さはセクション部分で0.2mを測る。溝の底面は、西側へ深くなる。断面観察の結果、この大溝が埋没した後に、外側寄りに一回り小さく断面U字形に掘り直しており、土層断面部分で幅1.03～1.2m、深さ0.15～0.22mを測る。溝内にはシルト～粘土が堆積し、流痕は認められず、滞水状態の水堀のような施設が想定される。溝の掘り方近くに木杭が3本打ち込まれており、護岸施設の可能性も考えられる。

遺物は堆積土上層から土師器小皿（57）、河内・和泉型の瓦質羽釜（56）、青磁挽（58）が出土した。遺物の下限年代は15世紀後半頃である。

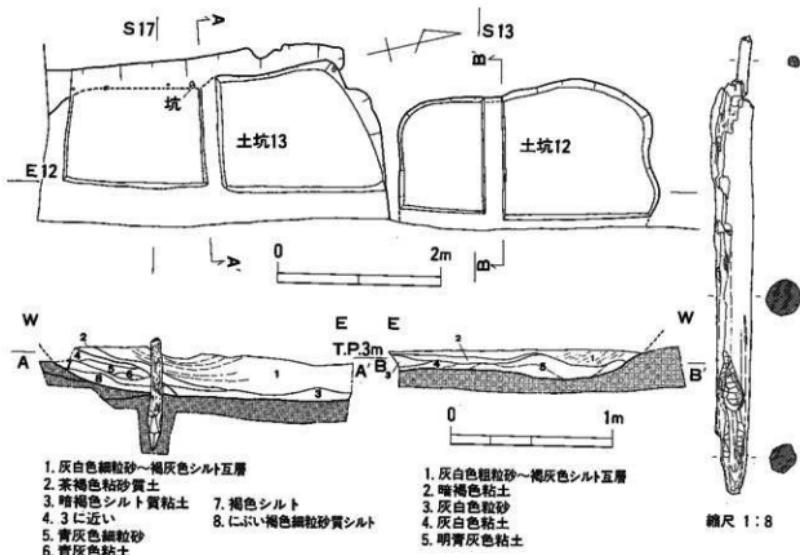
堆積土下層からは和泉型の瓦器挽（50～52）、瓦質羽釜、東播系捏鉢・甕、備前焼擂鉢、土



第20図 B区 土層断面図



第21図 B区 第1～3次造構面平面図



第22図 B区 第1次造構面平面・断面図

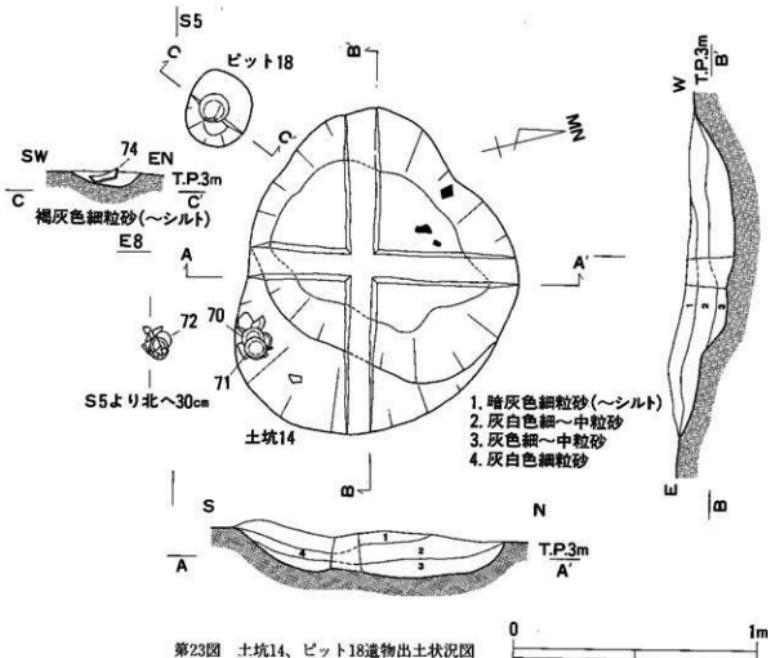
師器土鍋（53）・小皿（49）が出土した。時期としては13世紀前葉～中葉の瓦器碗が多く出土した。

#### 大溝1出土遺物（第26図）

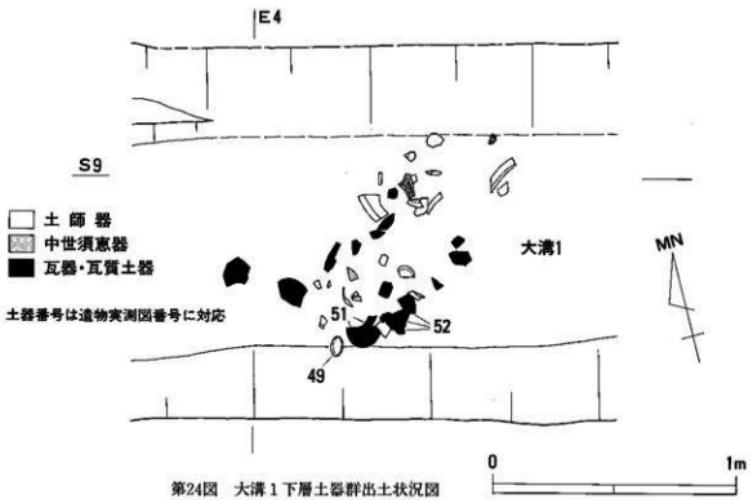
(55) は復元口径23.6cm、最大径29.5cm、残存高14.5cmを測る。直立する肩部に、水平に伸びる鋸を持ち端部は丸みを帯びる。口縁端部は外傾し、外面に浅い沈線状の段を呈する。外面は鋸直下より指圧調整、内面はハケを施す。(56) は復元口径25.4cm、残存高6.2cmを測る。内傾する肩部に外上方に伸びる鋸を持ち、口縁部は内弯気味に伸び、端部は平坦で沈線状、口縁外面は浅い沈線状の段を呈する。外面鋸直下はヘラケズリ、内面は指圧とハケを施す。鋸柄編年羽釜B群IV類（15世紀中葉）に類似する。(50) は高台径5cm、残存高2.6cmを測る。高台は断面が鋭角的な三角形を呈する。外面は指圧調整、内面に横方向、内部底面に格子状のヘラミガキを施す。

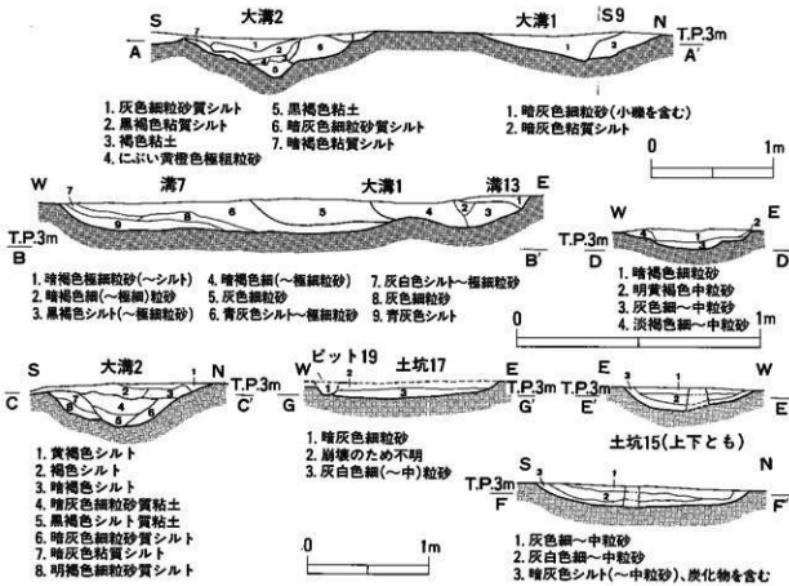
#### 大溝2

東西方向の大溝で、A区及び調査区東側へと伸びる。断面逆台形で現存幅1.03～2.18m、深さは断面部分で0.31～0.35mを測る。底面は西側ほど低くなる。断面観察の結果、この大溝が堆積した後、一回り小さく断面V字形に掘り直しており、断面部分で幅0.62～0.74m、深さ0.32～0.35mを測る。溝内にはシルト～粘土が堆積し、流痕は認められず、滯水状態の水堀の



第23図 土坑14、ピット18遺物出土状況図





第25図 第3次造構面土層断面図

ような施設が想定される。

堆積土上層からは、瓦器碗・須恵器捏鉢・土師器羽釜・土鍋・小皿(60)、台付き杯(62)、盤状木製品(65)、材質はスギ)、砥石(63・64)などが出土した。遺物の時期は12~13世紀代の残留遺物がほとんどである。

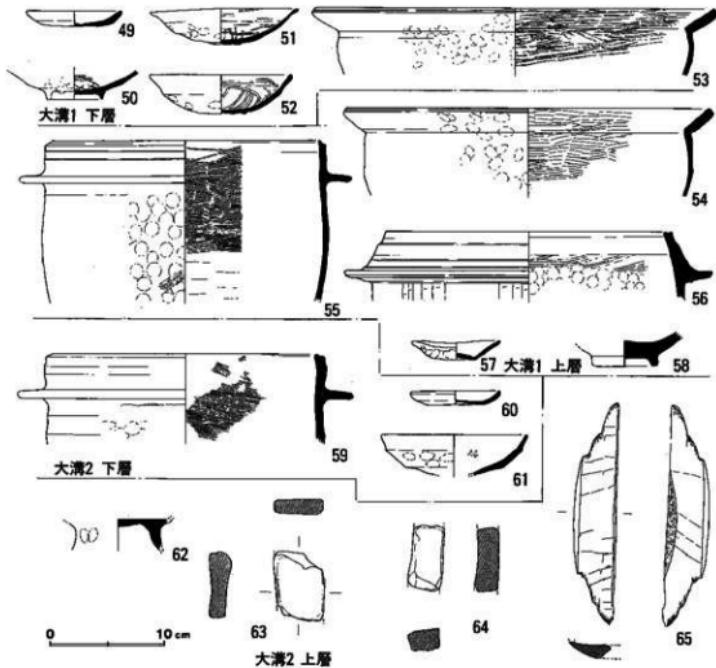
大溝下層からは瓦器碗(61)、瓦質羽釜(59)、須恵器捏鉢、土師器土鍋・羽釜・小皿が出土した。遺物の下限年代は14世紀代である。

### 溝7

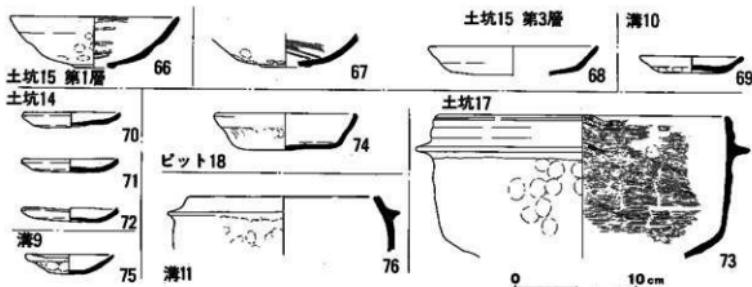
最大幅1.35m以上、深さは最深部で0.18mを測る。造構面は南側へ緩く傾斜しているのに相反して、底面は北側へと低くなる。堆積土にシルト～砂互層の流痕が見られることから、排(配)水路の様な施設と考えられる。遺物は細片のみで時期不明。

### 小溝

小溝は東西方向のもの(溝8・9)、南北方向のもの(溝11・12)、南北方向から東西方向に屈曲するもの(溝13)を検出した。溝12は底面が南へ低く、堆積土にシルト～砂互層の流痕が見られることから、排(配)水路の様な施設と考えられる。溝9内からは土師器小皿(75)、溝11内からは瓦質羽釜(76)が出土した。



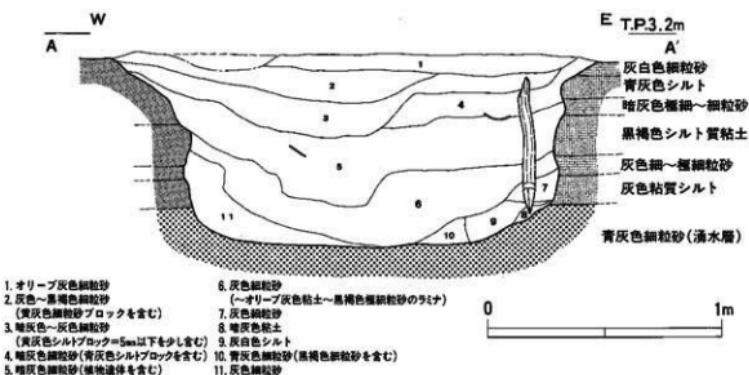
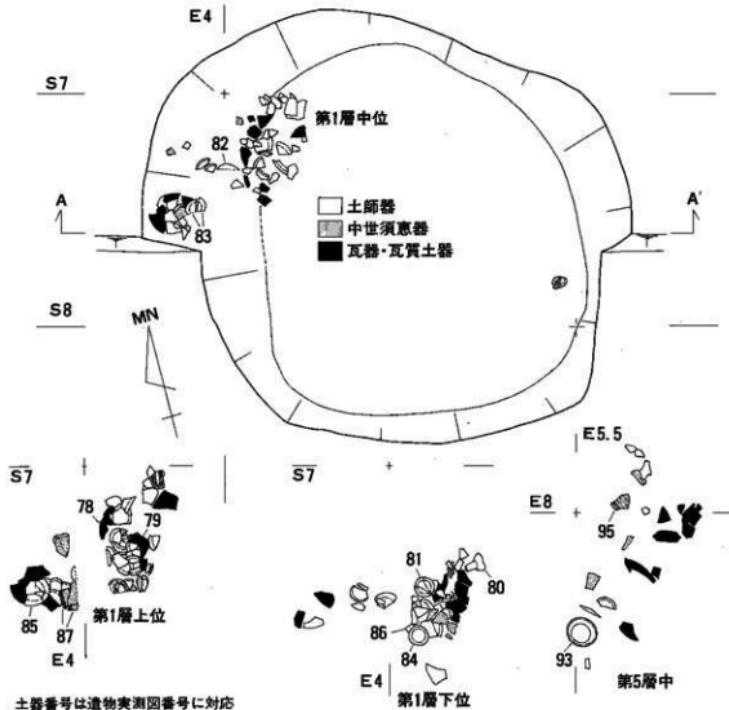
第26図 B区 大溝1・2出土遺物実測図



第27図 B区 土坑・溝・ピット出土遺物実測図

#### 土坑14（第23・27図）

平面亜円形を呈し、東西1.33m、南北1.11m、深さ0.2mを測る。堆積土は3層に分かれるが、最下層から7枚重ねの土師器小皿（70～72）や瓦器碗が出土した。



第28図 土坑16 土器群出土状況図

(70) は口径 8 cm、器高 1.1 cm、(71) は口径 8 cm、器高 1.3 cm、(72) は復元口径 14 cm、器高 2.4 cm を測る。ともに平らな底部から内弯気味に口縁部まで伸びる。外面は指圧調整、内面は横ナデを施す。

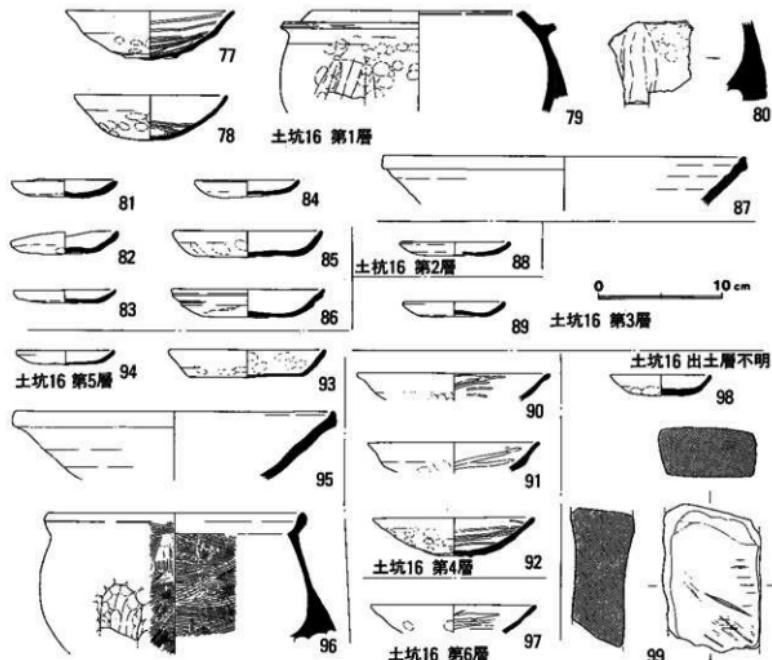
#### 土坑15

平面は隅丸長方形を呈し、東西 1.16 m、南北 1.8 m、深さ 0.2 m を測る。堆積土は 3 層から成り、各層から瓦器楕 (66・67)、土師器小皿 (68) などが出土した。

#### 土坑16 (第28・29図)

平面円形を呈し、上端部分で東西 2.03 m、南北 1.82 m、内径 1.5 m、深さ 0.8 m を測る。廃棄土坑と思われるが、底面が砂層（湧水層）に達していることから、井戸とも考えられる。堆積土は植物遺体を含む粘土が主体で、下部はベース層に類似するシルトである。ほぼレンズ状に堆積しており、自然堆積であると思われる。

遺物は堆積土全般から出土したが、特に中～上位から、和泉型の瓦器楕 (77・78・90～92・97)、東播系の須恵器捏鉢 (87・95)、瓦質三足羽釜 (79)、土師器足鍋 (80・96)・小皿 (81～86・88・89・98)、砥石 (99) が一括で出土した。遺物の時期は概ね 12 世紀末葉～13 世紀中葉



第29図 B区 土坑16 出土遺物実測図

である。(77) は復元口径13.8cm、器高4.1cm、(78) は口径12.4cm、器高3.7cmを測る。ともに外面は指圧調整、口縁部は横ナデのため外反気味で内面下部にヘラミガキを施す。(77) の高台は底面よりもやや上方に付き、断面三角形をなし、高台径4.2cmを測る。(78) は高台が消滅する。ともに尾上編年IV-2期(13世紀中葉)に相当する。(87) は復元口径29.6cm、残存高4cmを測る。口縁端部上面は垂直気味に立ち上がる。(79) は復元口径17.4cm、胴径22.6cm、残存高8.4cmを測る。内傾する肩部に、外上方に伸びる鈍の端面部は沈線状を呈し、口縁端部は内傾する面を持つ。外面は指圧調整、内面はナデを施す。(96) は復元口径21cm、胴径21cm、残存高11.6cmを測る。「く」の字状に外反する口縁を有する。外面は縦方向、内面は横方向のハケを施す。口縁端部を除く外面全域に煤が付着している。(93) は口径12.6cm、器高2.3cmを測る。平らな底部から口縁部まで内弯して伸びる。外面に指圧調整、内面にナデを施す。(85) は口径12cm、器高2.2cmを測る。平らな底部から口縁部にかけて直線的に伸びる。内外面ともに指圧調整、内面にナデを施す。

#### 土坑1

大溝1が埋没した後に掘られた土坑である。平面は亜円形を呈し、東西1.49m、南北0.81m、深さ0.13mを測る。下層から京都型の瓦質羽釜(73)が出土した。

#### ピット、柵列

ピットは調査区全域で検出したが、特に大溝1区画内に多く集中する。ピットは、礎板(ピット14)および柱痕(ピット15)が残るものや、柱の抜き取り痕と考えられるもの(ピット16・17)が見られ、これらは掘立柱建物の柱穴と考えられるが、建物として復元できるものは、現時点では見いだせない。また、柵列と考えられるピット列が計2列想定される。各ピット内からは、土師器や瓦器の細片が出土している。

#### 柵列1

主軸方位はN13°Wで、東西1間×南北2間、柱間は約1.8m間隔である。大溝1に沿ってL字形に並ぶ、大溝に伴う柵列である。ピットの掘方は径約0.2~0.3m、深さ0.07~0.26mを測る。このうちピット15には柱痕が残り、掘方は平面形が隅丸方形で東西、南北ともに0.21mを測り、柱痕径は0.08mを測る。

#### 柵列2

主軸方位はN5°Eで、東西3間×南北1間半、未掘の部分を含めて柱間が約1.6m間隔でL字形に並ぶ。ピットの掘り方は径約0.25~0.35m、深さ0.04~0.12mを測る。

#### ピット18(第23・27図)

平面は円形を呈し、東西0.3m、南北0.27m、深さ0.06mを測る。ピット底部において、ほぼ完形の土師器小皿(74)が、口を上に向けた状態で出土した。土器埋納ピットの可能性も考えられる。(74) は口径11.5cm、器高3.1cmを測る。比較的平らな底部から口縁端部にかけてやや外反気味に伸びる。外面に指圧調整、内面に横ナデを施す。

#### ④第4次遺構面（第30・31図）

N-W区の西端部において東西方向の落ち込み、南北方向の小溝1条、ピット1基、杭1本を検出した。落ち込み1は調査区外へ展開し、底面は東側へ深くなり、最深部で0.06mを測る。堆積土内から土師器小皿(100)が出土した。時期は13世紀後半と考えられる。溝14は南北方向の小溝で、調査区外へと延びる。最大幅0.75m、最深部で0.07mを測る。ピット19は長径0.32m、深さ0.09mを測り、内部より土師器小皿片が出土した。

#### ⑤第5次遺構面（第30・31図）

S-W区とS-E区において、土坑2基、ピット1基、杭等を検出した。土坑18は平面形不定形の東西6.26m以上×南北2.28m以上、深さ1.16m以上を測り、さらに調査区外へと伸びる。底面が湧水層（奈良期の水田面を覆う洪水砂層）に達しており、溜め池と考えられる。内部にはシルトや粘土が幾重にも堆積し、複雑な自然堆積と掘り直しを数次にわたって繰り返している様子が看取できた。遺物は堆積土の中位から多く出土した。京都系の瓦質羽釜(101)、楠葉型および和泉型の瓦器椀(102~105)、須恵器捏鉢(107・108)、土師器羽釜(112)、土師器（いわゆるての字状口縁）皿(106)、小皿(111)、箸(110、材質はヒノキ)、下駄状木製品(109、材質はスギ)である。遺物の時期は、尾上編年IV-2期（13世紀中葉）の瓦器椀などが出土しており、堆積の下限年代を表している。

この土坑の掘方に接して、護岸用と思われる木杭4本(113、他)が打ち込まれていた。土坑19は平面円形で東西0.83m、南北0.91m、深さ0.25mを測る。遺構内から瓦器椀、須恵器壺、土師器小皿が出土した。

#### ⑥第6次遺構面（第30図）

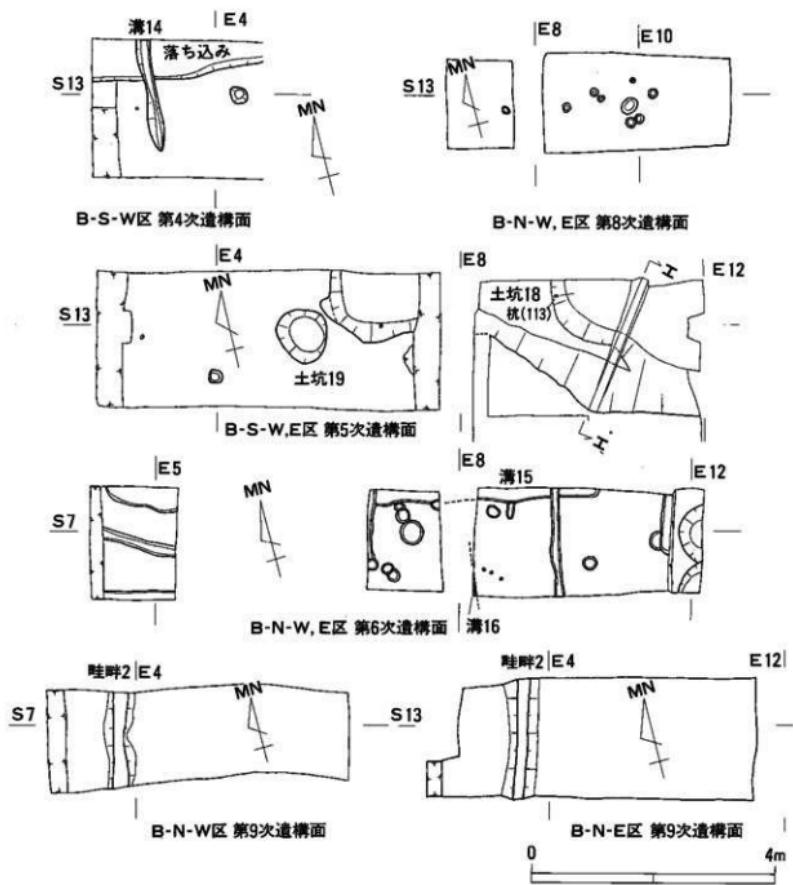
N-E区とN-W区において、小溝8条と、ピット13基を検出した。溝は東西・南北方向に交差する素掘り溝である。溝15は南肩のみを検出し、幅0.36m以上、底面は西側ほど深く、最深部で0.08mを測る。その他の小溝は幅0.11~0.18m、深さ0.01~0.03mを測る。これらは耕作に伴うスキ溝と考えられる。素掘り溝の方位は現行の地割りには近く、間隔については、特に規則性は見られない。

ピットは大きいもので長径0.4m、短径0.38m、深さ0.07m、小さいもので径0.2m前後、深さ0.03~0.15mを測る。現時点では建物や柵列の想定は難しく、多くは用途不明である。点状のピットについては径0.5m前後、深さ0.02~0.05mを測り、杭跡が考えられる。

遺物は各遺構中から土師器等の細片が出土したが、溝16から瓦器片が出土しており、時期としてはおおよそ平安末以降と考えられる。

#### ⑦第8次遺構面（第30図）

N-E区とN-W区東半部において、ピット9基を検出した。大きいもので長径0.3m、短

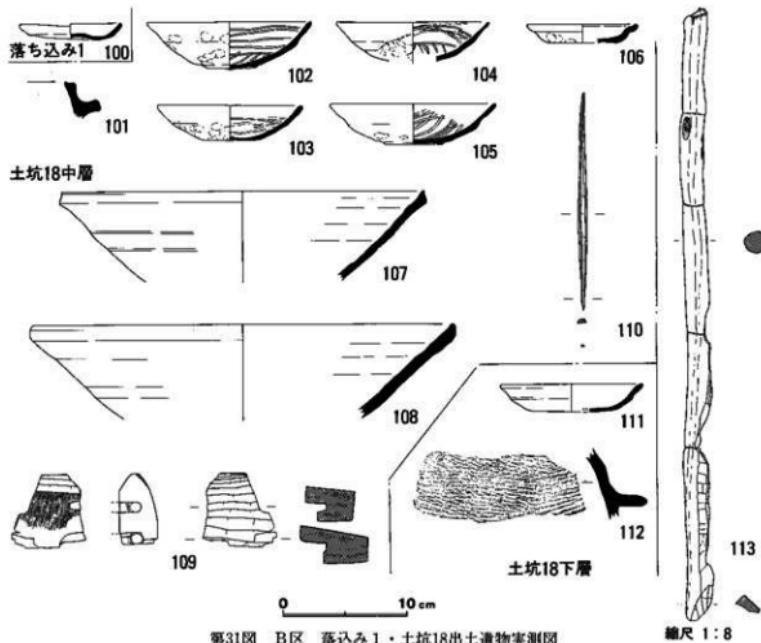


第30図 B区 下層造構平面図

径0.2m、深さ0.03m、小さいもので径0.09m、深さ0.07mを測る。現時点では建物や構列の想定は困難である。いずれのピットからも遺物は出土しなかった。

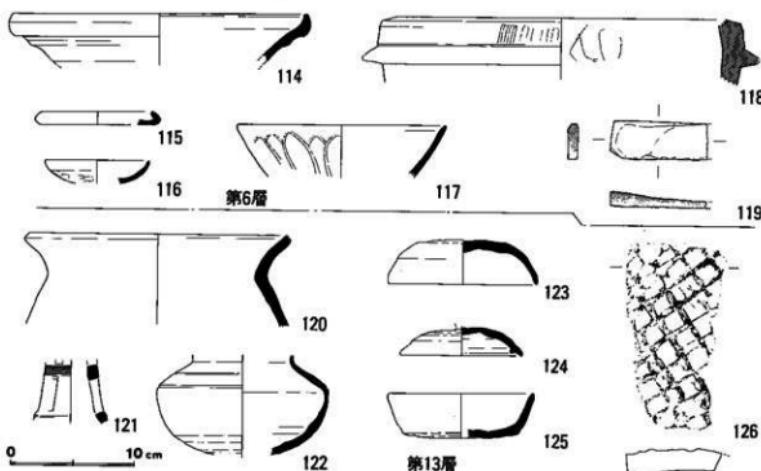
#### ⑥第9次造構面（第30図）

N-W区とS-W区において、南北方向の畦畔1条を検出した。畦畔2は上端幅0.08~0.15m、下端幅0.22m、高さ0.1~0.19mを測り、主軸の方位はN15°Eである。またN-E区の南側溝の断面観察により、畦畔状の高まりが確認できる。なおこの箇所は未掘である。



第31図 B区 落込み1・土坑18出土遺物実測図

縮尺 1:8



第32図 B区 遺物包含層出土遺物実測図

水田面を覆う洪砂層中からは、格子目叩きの平瓦（126）、須恵器杯蓋（123・124）・杯身（125）・高杯（121）・壺（122）・甕、土師器長胴甕（120）・甕、弥生土器高杯、ベース層直上からは木製品が出土した。遺物の下限年代は7世紀代の須恵器や瓦であることから、この頃の氾濫によって埋没したと考えられる。

#### c.まとめ

当調査区では合計15層、9面にわたって多くの遺構と遺物を検出した。まず、遺構の変遷の概略について述べる。第1次遺構面では、土坑、ピット等を検出した。B区で検出した土坑は池と思われるが、総じて遺構の展開状況は散在的で、耕作層と思われる。第2次遺構面では、A区の北端部で溝・土坑・ピットをやや集中した状況で検出したが、居住域とは断定ができない。第1・2次遺構面とも出土遺物では形成時期を求めることができず、第3次遺構面の下限年代が15世紀代であるので、それよりは後であろう。第3次遺構面は主要な遺構を検出した面で、大溝、溝、土坑、ピット、柵列等を検出した。L字状に巡る大溝1の北側には形成時期の幅はあるが、遺構が濃密にみられ、ここに居住域が展開するものとみられる。ただ、居住域としてもその端の部分であり、さらに北側に建物が配置されるものと考えられる。また、大溝2の南側も区画され、溝・柵列を検出したことから居住域とみられるが、ベースとなる面は溝1の北側部分に比べ、レベルが低く、軟弱である。これらの遺構から土師器、瓦器、陶器、青磁、瓦など13世紀後半から15世紀代までの幅広い時期の遺物が出土した。検出した遺構の性格については、溝1・2から青磁が出土したこと、L字状に巡る大溝等の遺構が展開することから言っても通常の農民層の居住域でなく、上層農民層の屋敷地と考えたい。屋敷地の形成時期は出土遺物から14～15世紀代に相当すると判断される。また、土坑16は同一面で検出した遺構であるが、出土遺物は13世紀代に属し、屋敷地形成以前の遺構と思われる。第4次遺構面では水田畦畔、ピット、溝、落ち込みを検出した。出土遺物から13世紀後半頃の水田面と考えられる。第5次遺構面では水田畦畔、土坑、ピットを検出し、出土遺物から13世紀中葉頃の水田面と考えられる。第6次遺構面では土坑、溝、ピットを検出し、出土遺物から12世紀末～13世紀初め頃のものと判断できる。第8次遺構面ではピット、第9次遺構面ではB区で水田畦畔を検出した。第9次遺構面は水田面と考えられ、水田覆土の出土遺物から奈良時代以前の可能性がある。第4次遺構面以下は総じて遺構の密度は稀薄であり、居住域とは思えず、4・5・7・9次遺構面で畦畔を検出したように耕作地であったと判断される。以上の当調査区の変遷をまとめてみると、最も古い遺構は第9次遺構面の奈良時代以前の可能性がある水田畦畔で、それ以降鎌倉時代（12世紀末～13世紀後半頃）まで地盤のレベルを上昇させながら耕作地を形成する。この地盤の上昇の成因は当地の西方を南流する高川の堆積作用によるものであろう。さらに、14世紀頃に自然堤防状の微高地に屋敷地が形成され、15世紀頃まで存続する。これ以降は居住域ではなく、耕作地であったようである。

さて、以上のように中世期の集落及び耕作の跡を確認できたが、次に文献史料を含め改めて

検討を行いたい。当地周辺は中世は春日社領垂水西牧及び東寺領垂水莊に含まれ、その歴史的展開については先学の研究により明らかにされており、特に島田次郎氏らの研究に詳しい。<sup>(註1)</sup> 今回の調査地点は条里復元によると、豊嶋郡中条4条1里22坪に当たり、春日社領垂水西牧に含まれる。まず、当地を記載した史料である文治5(1189)年の『春日社領垂水西御牧権坂郷田畠取帳』によると、当坪は「荒二反三百二十 作七反四十」とあり、「友久」「則行」「宗友」などの名がみえ、耕地と荒地はあるが、屋敷地の記載はない。今回の調査では第6次造構面が時期的に該当する。この層は土器の細片が少量出土したのみで集落が存在するとは思えず、耕作層と考えたが、文献史料を裏付けるものといえる。次に続く土地台帳の史料は貞治元(1362)年の『御牧領家舎人名寄帳』(以下、「名寄帳」と略す)と寛正3(1462)年の『春日社領垂水西牧東方取帳』(以下、「東方取帳」と略す)がある。『名寄帳』には当坪に該当する名として「延行名」ほか5名があり、屋敷地の記載は見られない。また、『東方取帳』には「廿二坪 七反六十歩」とあり、名は「忠吉名」ほか4名あるが、同じく屋敷地の記載は見られない。両史料とも屋敷地の記載を欠くが、実際は14~15世紀の屋敷地と思われる遺構を検出している。ここで再び『名寄帳』全体をみると、屋敷地関係の記載は、長寿名で二条一里十四坪及び四条一里十六坪で堂敷、善光寺名で五条一里廿二坪及び五条一里廿七坪で寺敷、安徳寺名で五条一里九坪で堂敷の記載があるのみで極めて少ない。また、『東方取帳』には屋敷地関係の記載が無く、このように屋敷地が存在すると考えられるのに記載がほとんどないのは、基本的に両史料が屋敷地の記載を省いたものと思え、『名寄帳』及び『東方取帳』に記載のない屋敷地が存在していても矛盾するものではないといえる。ところで、今回の調査では中世瓦の出土があり、第6層から軒平瓦、軒丸瓦、平瓦、丸瓦などの破片、大溝1から少量の平・丸瓦片が出土した。特に宝珠唐草文軒平瓦<sup>(註2)</sup>(36)は文様の全体を復元できる好資料で、藏人遺跡第1次調査の中世石組溝から出土した軒平瓦に同范ではないが、近似する。これらは当該時期の史料にみえる円隆寺という中世寺院に関連したものと考えられ、存在を裏付ける上で重要なものと思われる。

註1) 島田次郎編『日本中世村落史の研究』1966年 吉川弘文館

註2) 藤原 学ほか『藏人遺跡』1979年 吹田市教育委員会・吹田市下水道部

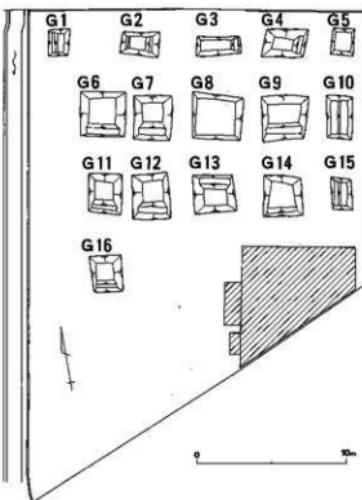
#### <参考文献>

- ・鍬柄後夫「大阪府南部の瓦質土器(1)」「日置莊遺跡」分析・考察編 1995年 劍大阪文化財センター
- ・尾上実「大阪南部の中世土器―和泉型瓦器編―」「中近世土器の基礎研究」1985年 中世土器研究会
- ・中世土器研究会編「概説中世の土器・陶磁器」1995年 真隠社
- ・横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」「九州歴史資料館研究論集」4 1978年
- ・菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」奈良國立文化財研究所創立30周年記念論文集「文化財論叢」1983年 同朋社出版

### (3) 第20次調査

#### 1. 調査の経過

調査地点は豊津町608-1・609-1で、平成7年度に試掘調査を実施した結果、中世遺物包含層等を確認したことから、調査範囲を拡大することとし、平成9年2月20日から調査を開始した。調査は調査区16箇所を設定し（G1～G16、計92m<sup>2</sup>）、現地表下1.0mまでの近時の盛土層等の堆積層については重機で掘削し、以下を人力により調査を実施した。調査の結果、13世紀前半から15世紀後半にかけての中世の遺構面を3面（1次面～3次面）確認し、各々の遺構面上で溝、畦畔等の遺構を確認し、写真撮影、図面作成等の記録作成後、3月5日に現地における調査を終了した。



第33図 調査区平面図

#### 2. 調査の成果

##### (1) 土層序

調査区の現在の地表面は標高3.8～3.9mであり、各調査区の土層序は遺構内堆積土を除くと、遺構面等の状況から基本的に以下の5層に大別される。

###### I層（1～3）

調査区全域に広がる現代の盛土層及び旧耕土層であり、現地表下0.8～0.9mにまでおよぶ。

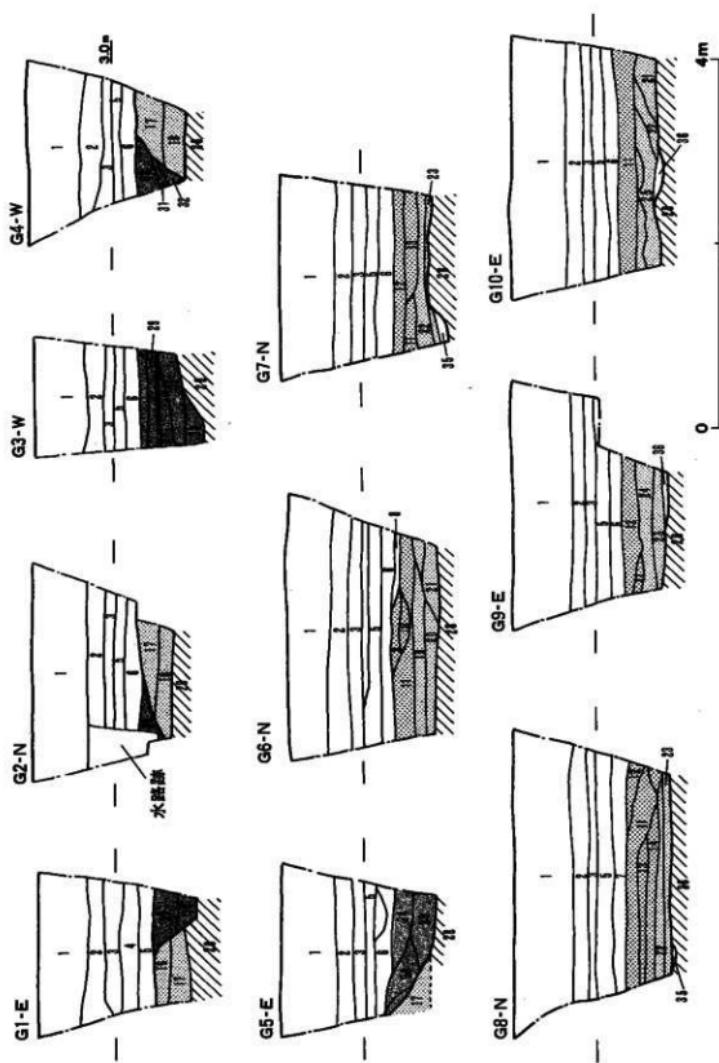
###### II層（5～8）

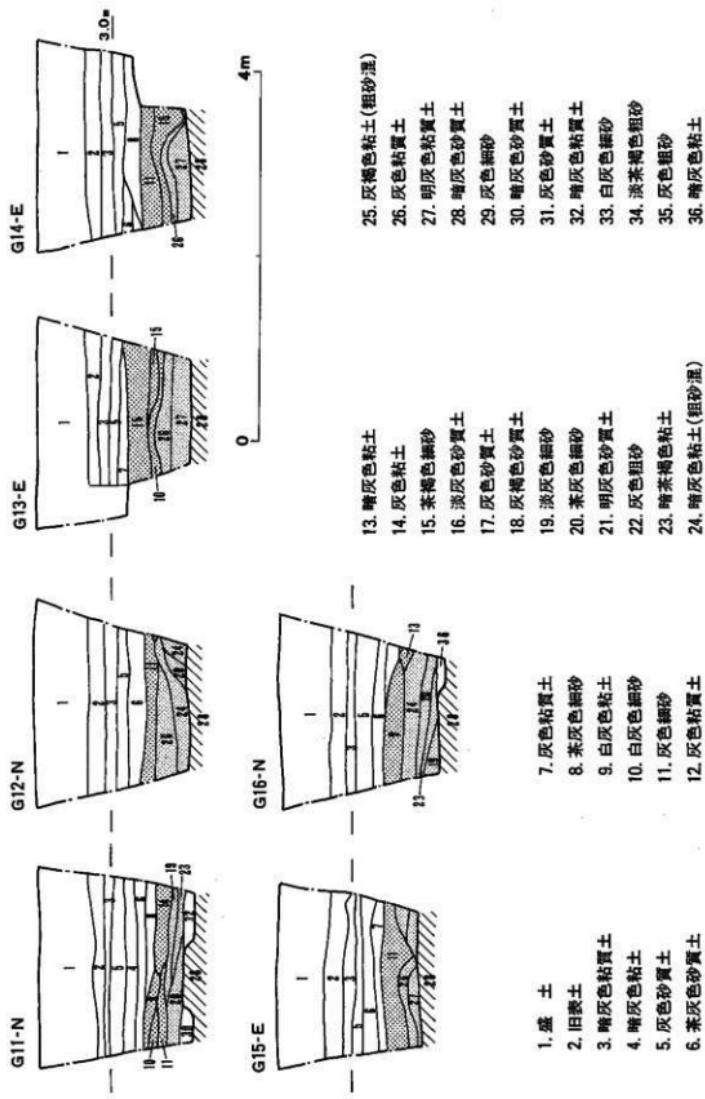
暗灰色粘土、灰色砂質土、灰色粘質土、茶灰色細砂等近世以降の堆積と考えられ、現地表下1.0～1.2mにまで及ぶ。

###### III層（9～15）

1次面形成層であり、G6～G16で認められる灰色系の砂層、粘質土、粘土層の堆積層である。上面は標高2.64～2.80mで確認される。G6・G11・G16においては白灰色粘土の堆積により、10～15cmの高まりが認められ、南北方向の畦畔の可能性が考えられる。しかし、調査区東半部の1次面検出状況は砂層の部分が多く、激しい土砂の流出の状況が伺える。G8、暗灰色粘土層（13）から、備前焼擂鉢が出土している。また、調査区北端のG1～G5では他の調査区と異なり、III層相当層の堆積は認められない。

第34図 開発区土壤断面図(1)





第35图 考查区土层断面图(2)

#### IV層（16～27）

調査区全域に広がる2次面形成層であり、灰色系の砂質土、粘質土、粘土層の堆積層である。上面は標高2.34～2.74mで確認される。調査区北端のG1～G5では淡灰色砂質土（16）・灰白色砂質土（17）をベース層として東西方向の溝が確認され、G13～G15では灰色粘質土（26）・明灰色粘質土（27）をベース層として東西方向の畦畔を確認した。G9・G10・G12では2次面の検出状況は粘土及び粘質土層であるが、G6～G8、G11では砂層となる。G1～G5で確認された溝内堆積土から瓦器、土師器皿、東播系須恵器捏鉢、瓦質鍋等が出土している。

#### V層（28）

調査区全域で確認された3次面形成層であり、暗灰色砂質土である。上面は標高2.14～2.36mで確認され、G6・G11・G16で南北方向の畦畔を、G9・G10で東西方向の溝を確認した。G6・G11・G16の南北方向の畦畔は1次面の畦畔とほぼ重なる地点に位置している。溝内からは瓦器の細片等が出土している。

以上のように、調査区の堆積状況及び遺構面の地盤高は各トレンチごとに差が認められる。V層は調査範囲全域で確認され、安定した状況が認められるが、その上層のIII層及びIV層は砂層、砂質土層、粘質土層、粘土層の複雑な堆積が認められ、洪水等の影響によると考えられる不安定な状況である。部分的に粘土層の堆積が認められ、その部分に畦畔等の遺構が確認されるが、粘土層は全域に広がるものではなく、砂層の堆積も多く認められ、やはり、洪水等による土砂の流出あるいは堆積によるものと考えられる。また、北端部の調査区G1～G5では2次面及び3次面地盤面が他より高く、調査区北側の地盤が全体に高くなることが考えられる。

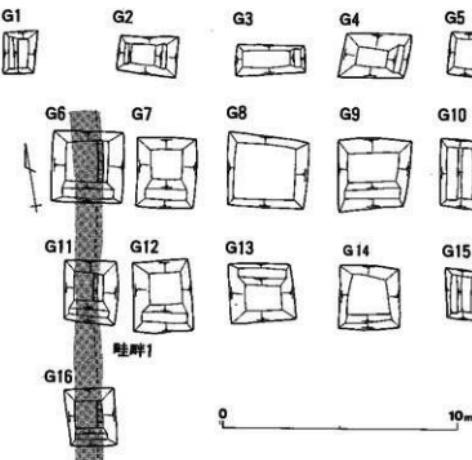
近世以降の堆積層と考えられるII層は比較的平準な堆積が認められ、調査区は耕作地として、下層の中世よりは安定した状況が伺える。

#### (2) 遺構

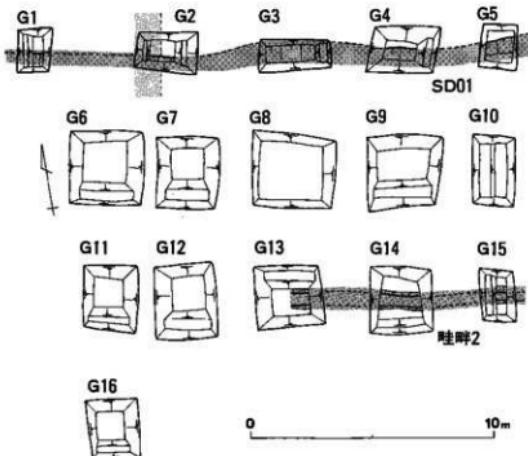
##### a. 1次面

III層をベース層とし、

G6・G11・G16で白灰



第36図 1次面平面図



第37図 2次面平面図

色粘土の堆積による、南北方向の畦畔状の高まりを延長13.5mにわたって確認し、N 10° E 前後に方位をとる(畦畔1)。高さは10~15cmであるが、西側の肩は不明確であり、水田面自体、西側が高いのか、あるいは幅1m以上の規模の大畦畔なのかは調査範囲では確認できなかった。畦畔部分からは遺物は出土していないが、G 8、暗灰色粘土層(13)から備前焼播鉢が出土している。

### b. 2次面

IV層をベース層とし、G 1~G 5で東西方向の溝(S D01)を、G13~G15で東西方向の畦畔を確認した。

#### 溝(S D01)

延長20mにわたって確認し、N 80° W前後に方位をとる。南側の肩は調査区内では確認できず、溝の幅は1.0m以上になるものと考えられる。確認された北側の肩部は標高2.56~2.74mで、深さは70cm以上となる。溝内の堆積層は大きくは3層に分けられ、上層は砂層(29・31・33)、中層は砂質土層(30・31)、下層は粘質土層(32)となる。遺物はG 3で土師器皿等がまとまって出土しているが、他の調査区では遺物の出土は非常に少ない。

G 3では上層の灰色細砂層(29)で土師器皿、東播系須恵器捏鉢、瓦質鍋が非常に密集した状況で出土しており、一括して投棄された状況が伺われる。下層の暗灰色粘質土層(32)では瓦器碗、東播系須恵器碗が出土している。

また、G 2では現代の南北方向の水路とはほぼ一致する地点において、南北方向の溝状の落込みを確認したが、G 2以南の調査区では、調査地点がずれているためか、確認できず、南北方向に統くものの確認はできなかった。堆積土はS D01と同様の砂層である。

### 畦畔（畦畔2）

G13～G15では灰色粘質土（26）及び明灰色粘質土（27）をベース層として、東西方向に溝S D01と同様の方位をとる幅70cm、高さ10cm前後の畦畔を延長9mにわたって確認した。但し、G13の西半部から不明確となり、西側のG11・G12ではベース層であるIV層は砂層を含む複雑な堆積となり、上面では畦畔の延長部分は確認できなかった。溝S D01とは10m前後の間隔がある。

G13では不明確であるが、G14・G15では上に粘質土を盛って、作り直しが認められる。また、畦畔の南側に幅40cm、深さ20cm前後の溝が畦畔に沿って掘られている。G15では畦畔を境に水田面は南側が北側より10cm前後高くなることを確認した。水田面の高さについては、畦畔北側では標高2.36m前後、南側では2.44～2.56mとなるが、溝S D01北側の肩部とは30cm前後の比高差が認められる。

### c. 3次面

V層をベース層とし、G6・G11・G16で南北方向の畦畔（畦畔3）を、G9・G10で東西方向の溝（SD02）を確認した。

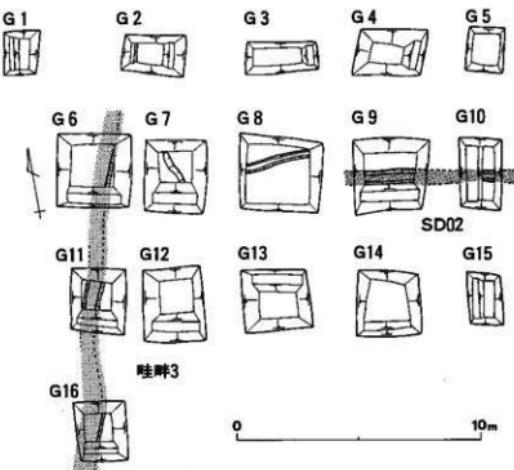
### 畦畔（畦畔3）

N10°E前後に方位をとり、延長12mにわたって確認した。西側の肩はG6・G16では不明確であるが、G11では弱い段差が確認され、肩の可能性が高く、幅70cm、高さ10～14cmとなる。

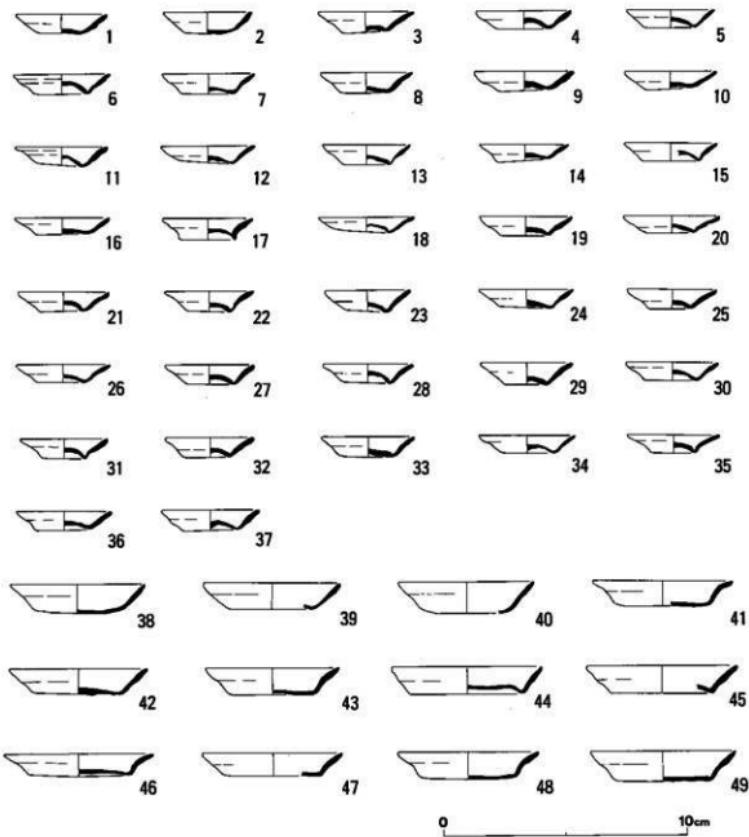
1次面の畦畔1とはば重なる地点に位置する。

### 溝（SD02）

N80°Wに方位をとり、延長5.5mにわたって確認した。幅60cm前後、深さ8～10cmである。堆積土は暗灰色粘土であり、遺物は出土していない。G9以西での溝の延長部分は確認されず、G8でも溝を確認しているが、幅、深さとも小規模なもので、走行方向からは、SD02とは別のものと考えられる。



第38図 3次面平面図



第39図 出土土器実測図(1)

### (3) 遺物

今回の調査における出土遺物はコンテナ4箱分で、瓦器、土師器皿・土釜、瓦質土釜・鍋、東播系須恵器、瓦等が出土しているが、溝S D01出土遺物以外は大半が包含層出土の細片である。以下、溝S D01出土のものについて主として報告する。

#### a. S D01上層出土遺物

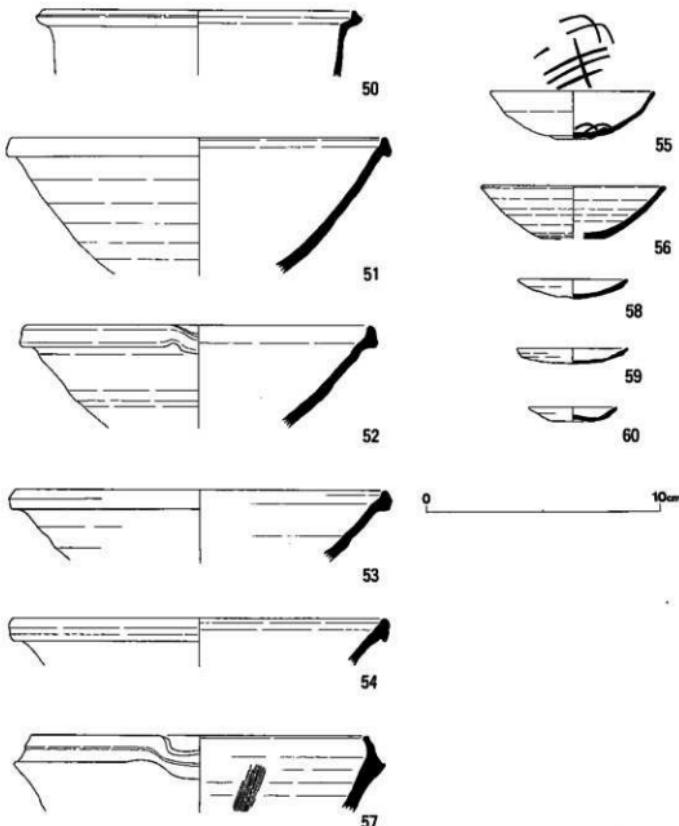
G 3、灰色細砂層(29)で集中して出土しており、土師器皿、東播系須恵器捏鉢、瓦質鍋がある。瓦器の出土は認められなかった。

### 土師器皿 (1~49)

大きさからは、口径7.0~8.0cmの小皿と11.0~12.1cmの大皿に分けられ、色調からは淡黄色～灰白色系のものと淡褐色系の2種に分けられる。ともに体部内面及び口縁部はヨコナデ、体部外面下半部は押圧調整を施す。

土師器小皿（1~20）は淡黄色～灰白色系、(21~37)は淡褐色系で、底部中央を上方に突出させた、所謂ヘソ皿である。器高は1.4~1.8cmで、口径は7.4cm前後、器高1.6cm前後のものが多い。器壁は比較的厚手であり、口縁部はやや外反気味となる。

大皿（38~47）は淡黄色～灰白色系、(48~49)は淡褐色系である。器高1.8~2.6cmで、口縁部は外反気味に外上方に伸び、端部を丸くおさめる。



第40図 出土土器実測図(2)

### **瓦質土鍋 (50)**

口径26.6cmで、残存する体部上半部は直線的に伸び、口縁部は内彎して上方に屈曲して、受け口状を呈する。体部外面は押圧調整、口縁部及び内面はナデ調整を施す。体部外面に煤が付着する。

### **東播系須恵器捏鉢 (51~54)**

片口鉢で口径28.8~31.8cmであり、口縁端部は上下に拡張され、縁帯を形成する。

#### **b. S D 01下層出土遺物**

G 3、暗灰色粘質土層 (32) 出土資料であり、和泉型瓦器椀と東播系須恵器椀がある。瓦器椀 (55) は口径14.2cm、器高4.1cm、器高指数28.87であり、尾上編年のⅢ-3型式に相当する。須恵器椀 (56) は口径15.6cm、器高4.6cmであり、底部は小さく、直線化した体部を有する。

#### **c. 包含層出土遺物**

(57) はG 8、暗灰色粘土層 (13) 出土の備前焼擂鉢である。口径28.8cmで、口縁部は内上方へ拡張して立ち上がり、内面にはクシ描による8状を単位とする擂目が認められる。IV期後半の資料である。(58) ~ (60) はG 8、灰色粘土層 (14) 出土の資料であり、(58)・(59) は瓦器皿、(60) は土師器皿である。瓦器皿 (58) は口径9.2cm、器高1.6cm、(59) は口径9.6cm、器高1.4cmで、外面底部は押圧調整、口縁部及び内面はナデ調整を施す。土師器皿 (60) は口径7.6cm、器高1.2cmである。

### **3. まとめ**

今回の発掘調査では中世の3時期の造構面を確認し、溝及び畦畔を検出した。1次面では南北方向の畦畔を確認し、畦畔形成土等の明確な造構からの出土遺物は確認されていないが、畦畔東側のG 8のⅢ層中から備前焼擂鉢 (57) が出土しており、15世紀後半の資料と考えられ、上限の年代と考えられる。2次面では東西方向の溝及び畦畔を確認しており、溝S D 01ではG 3において上層で土師器皿、東播系須恵器捏鉢、瓦質土釜が一括して投棄された状況で出土しており、14世紀中葉の資料と考えられる。また、溝下層出土の瓦器椀は13世紀前半の資料であり、掘削時期と考えられる。3次面では1次面の畦畔とほぼ重なる地点で、南北方向の畦畔を確認するとともに、東西方向の溝を確認している。時期を判断できる明確な遺物は出土していないが、遺物の出土状況等から13世紀前半の時期が考えられる。

各造構面では畦畔が確認されていることから、調査地点は13世紀前半から15世紀後半にかけての水田を中心とする耕作地と考えられるが、頻繁に洪水に見舞われる不安定な状況が伺える。

調査で確認した、畦畔等は一帯に施行された条里制の方位に一致するものであり、調査地点は条里制施行下に經營された水田地帯と考えられる。また、調査地点は条里坪付けからみると

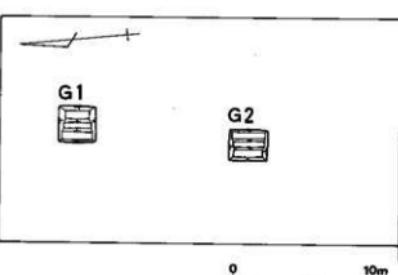
四条一里三十三及び三十四坪にあたり、2次面の溝S D01は三十四坪と二十七坪の坪境にはほぼ一致する地点である。南に位置する畦畔2は溝S D01と10m前後の間隔が有り、東西方向の長地型の土地区画の可能性を考えられる。1次面及び3次面で確認した南北方向の畦畔については、ほぼ重なる地点である。一方、G 3、2次面で南北方向の溝と考えられる落込みを確認したが、これも現代の水路とほぼ一致する地点にあたる。畦畔1及び畦畔3とは1m前後ずれるが、三十三坪と三十四坪の坪境にはほぼ相当する地点と考えられる。また、昭和60年度に今回の調査地点の西側（豊津町611-5）において、調査を実施し、東西方向の畦畔を確認したが、その延長部分と畦畔2の間隔は、S D01と畦畔2の間隔にはほぼ一致し、坪付けでは三十三坪に当たるが、一帯で、長地型の土地区画が行われていたことが考えられる。

出土遺物については、調査地点が耕作地であることから、明確に遺構に伴うものは少ないが、S D01のG 3上層におけるまとまった土器の出土については、耕作地に伴う出土状況とは考えにくい。また、G 8のⅢ層出土の瓦器皿（59）・（60）については、市内では類例は少なく、南河内の河内長野市天野山金剛寺遺跡等で地鎮具等の特殊な使用例がみられるものである。天野山金剛寺遺跡における分類（河内長野市遺跡調査会「天野山金剛寺遺跡」1994）を参照すると、7類に相当するもので、15世紀後半の年代が考えられる。

これらの遺物の性格については、文献史料をみると至徳三年（1386）の「摂津垂水庄浜見取帳」では二十七・二十八・三十四坪には屋敷地が、二十七・二十八坪には圓隆寺堂敷や社敷がみえ、寛正四年（1463）十月の「摂津垂水莊浜見取帳」にも二十八坪に圓隆寺堂敷が認められ、調査地点周辺地に屋敷地や寺院の存在が想定され、その関連が考えられる。特に、少量ではあるが瓦の出土も認められることや、瓦器皿については河内長野市天野山金剛寺遺跡等の特殊な使用例から、圓隆寺等の寺院と関連する可能性のある資料である。

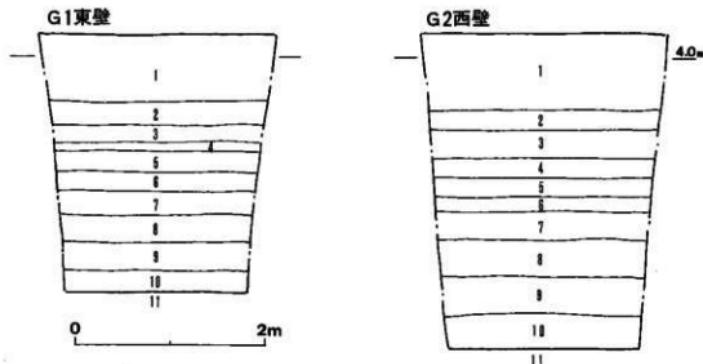
#### (4) 第21次調査

調査地点は、江坂町2丁目485-1・3で、平成8年度に実施した第20次調査地点の北側の地点に当たる。調査は平成9年12月4日に調査区2ヶ所(G1・G2 計12m<sup>2</sup>)設定して実施した。調査区の土層序は両調査区とも同様の堆積状況で、盛土層及び旧表土層以下、現地表下、1.65-1.85mまでは粗砂層を中心とする堆積が続き、洪水等の激しい土砂の流出の所産によるものと判断された。また、それ以下の堆積状



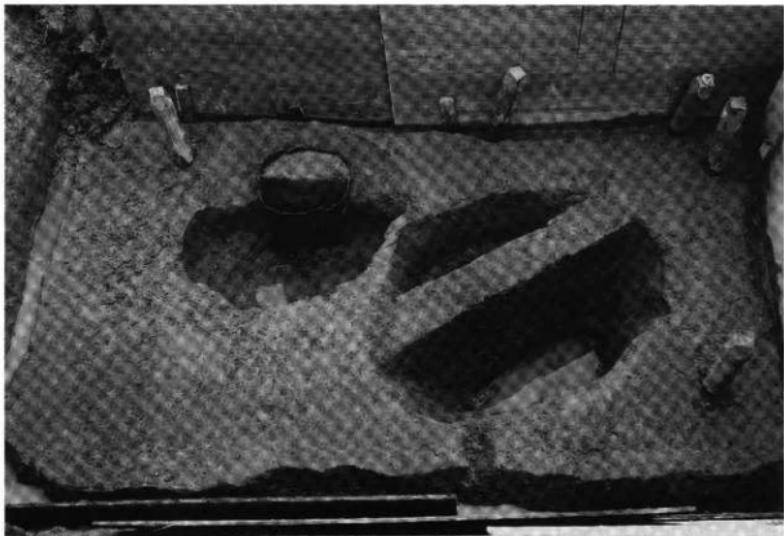
第41図 調査区平面図

況は、現地表下2.7~3.3mまで掘削し、シルト層及び粗砂を多く含む粘土層の堆積を確認したが、遺構・遺物は確認されなかった。今回の調査地点は、第20次調査の状況から遺構・遺物の出土が予想されたが、調査の結果、下方で確認された粘土層が水田面となる可能性も考えられたが、畦畔等の遺構は確認できなかった。



- |           |               |
|-----------|---------------|
| 1. 盛 土    | 7. 灰色シルト      |
| 2. 旧表土    | 8. 灰色粘質土      |
| 3. 淡褐色粗砂  | 9. 灰色粘土(粗砂混)  |
| 4. 喰茶褐色粗砂 | 10. 灰色粘土      |
| 5. 淡灰褐色粗砂 | 11. 灰色粘土(粗砂混) |
| 6. 灰色細砂   |               |

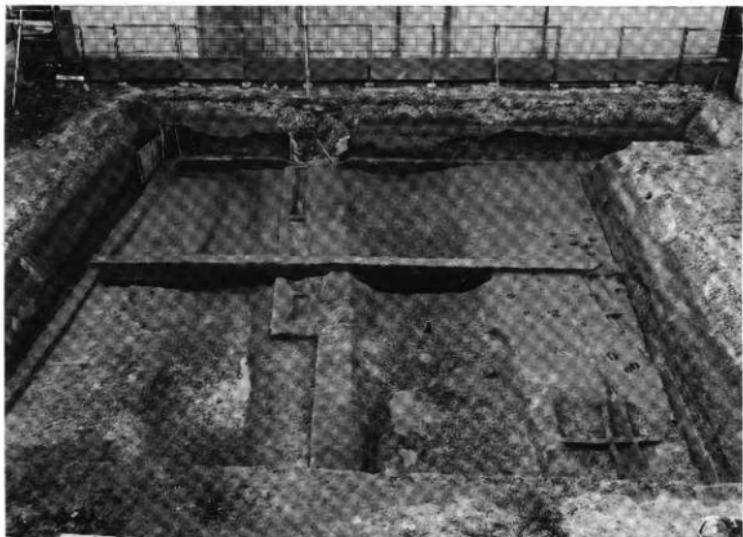
第42図 調査区断面図



井戸1・土杭1 検出状況（北から）



井戸2 検出状況（東から）



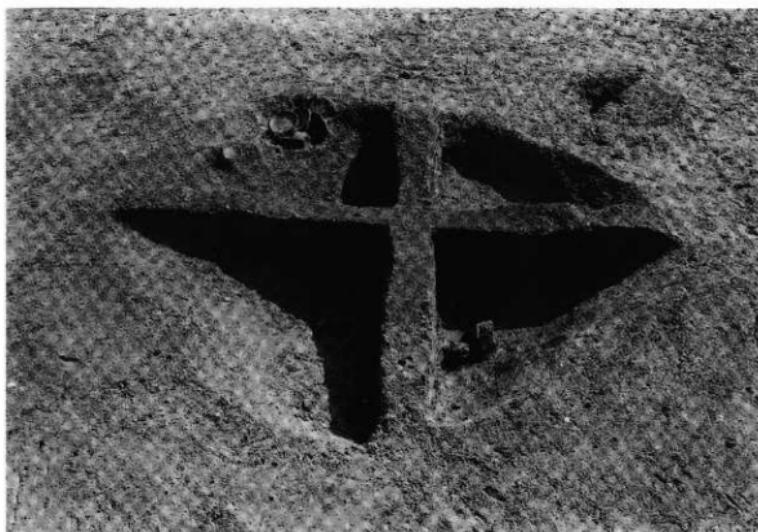
A区第3次遺構面全景（東から）



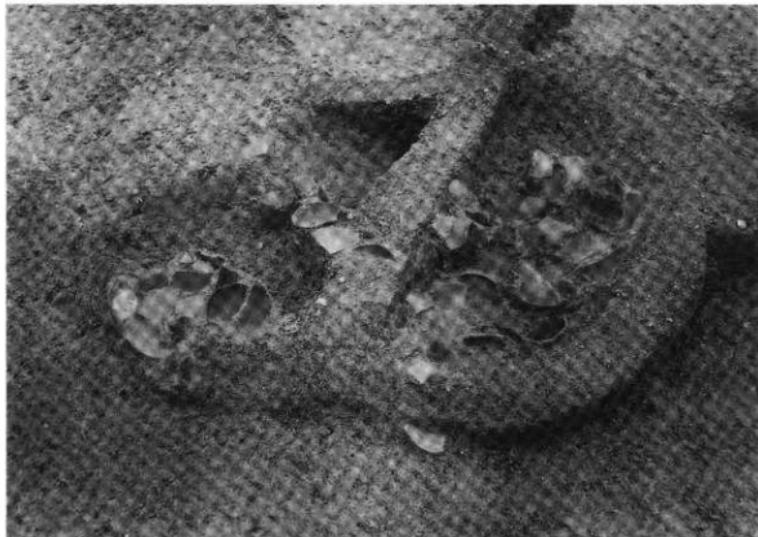
A区第5次遺構面・水田吐畔（西から）



B区第3次遺構面全景（西から）



上坑14・ピット18上器群出土状況（北から）



土坑16 土器群出土状況（南から）



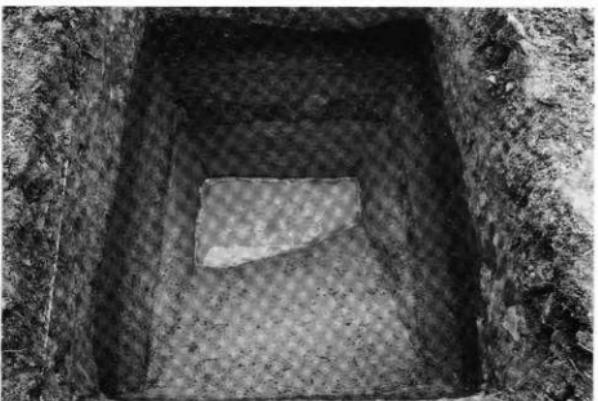
B区第9次遺構横面・水田咲畔（西から）



調査状況（南から）



G3 SD01上層  
土器出土状況（西から）



G5 SD01  
(北から)

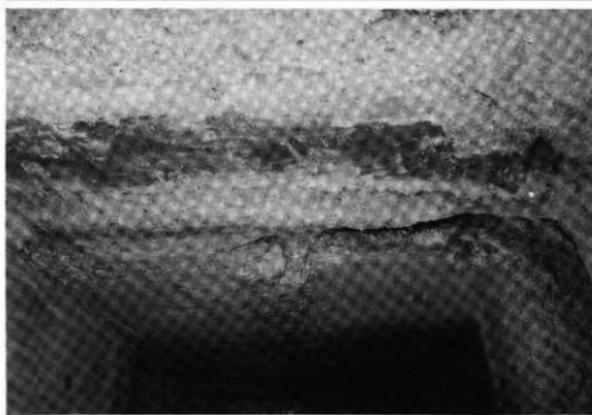
図版六  
20次調査(2)・21次調査



20次調査  
G15 哇岬調査状況  
(西から)



21次調査  
調査地近景（南から）



21次調査  
G1 断面（西から）

## 報告書抄録

ふりがな	へいせい 9ねんどまいぞうぶんかざいきんきゅうはつくつちょうさがいほう
書名	平成9年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報
副書名	藏人遺跡
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	西本安秀 堀口健二 増田真木
編集機関	吹田市教育委員会
所在地	〒564-0041 大阪府吹田市泉町1丁目3番40号 TEL(06)384-1231
発行年月日	西暦 1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くろ うど 藏人 18次	すいた し とよつちよう 吹田市豊津町 931-3	27205	85	34° 45' 38"	135° 29' 50"	19961205～ 19970110	87	建物の 建築
くろ うど 藏人 19次	すいた し えきあらちよう 吹田市江坂町 2-490-1	27205	85	34° 45' 38"	135° 29' 50"	19970120～ 19970331	465	建物の 建築
くろ うど 藏人 20次	すいた し とよつちよう 吹田市豊津町 608-1-609-1	27205	85	34° 45' 38"	135° 29' 50"	19970220～ 19970305	92	建物の 建築
くろ うど 藏人 21次	すいた し えきあらちよう 吹田市江坂町 2-485-1-3	27205	85	34° 45' 38"	135° 29' 50"	19971204	12	建物の 建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
藏人 18次	集落遺跡	中世	井戸	土師器、瓦器、須恵器、瓦質土器	
藏人 19次	集落遺跡	奈良 平安 中世	溝、土坑、ピット、 畦畔、柵列、大溝	土師器、瓦器、 瓦、須恵器、瓦質土器、陶磁器	
藏人 20次	集落遺跡	中世	溝、畦畔	土師器、瓦器、 瓦、須恵器、瓦質土器	
藏人 21次	集落遺跡	中世	なし	なし	

〔平成 9 年度〕

**埋蔵文化財緊急発掘調査概報**

藏人遺跡

平成 10 年 3 月 31 日

編集 吹田市泉町 1 丁目 3 番 40 号  
発行 吹田市教育委員会